



## 第2章 『宋詩別裁』 五言絶句訳注

### はじめに

本章は『宋詩別裁』に収める五言絶句四十五首の訳注を試みるものである。

『宋詩別裁』はもとの名を『宋詩百一鈔』といい、清の乾隆年間、張景星らによって編まれた宋詩の総集で、すべて八巻、宋の詩人百三十七人、六百四十七首を収める。沈徳潜の編んだ『唐詩別裁』等にならって、のち『宋詩別裁』と称されるようになった。

『宋詩別裁』は詩型別の構成になっており、五言絶句は巻八に五十四首収載するが、うち王安石の作品九首については第一章に収めるため、いまこれを除く作品に注解をほどこす。詩題の前には「別裁-1」等と『宋詩別裁』の掲載順に基づく作品番号をふった。

宋詩の全体像をとらえ、そこから適切な作品を選び取る能力をとうてい持ち合わせないわたしたちにとって、注解作業の対象となる作品を選択するにあたっては、既存の宋詩総集によるほかない。数ある宋詩総集のなかから『宋詩別裁』を選んだのは、これが詩型別の編集であったことと、収載作品数が適当であったからにほかならない。

ちなみに、『宋詩別裁』が採る五絶の多くは、同じく詩型別に編集された『御選宋詩』の収載作品と重なる。『宋詩別裁』の編者はその作品選択に際して、先行しかつ分量にまさる『御選宋詩』を参考にし、さらに取捨を加えたものと思われる。

底本には乾隆二十六年(1761)誦芬樓刊『宋詩別裁』の影印本(中華書局1975)を用い、排印本(商務印書館1962)を参照した。また作品のいちいちについては、当該作者の別集にあたると同時に『全宋詩』を参照し、文字の異同があればこれを記した。

(和田英信)

## 別裁-1 范仲淹「出守桐廬道中」(1)

「出でて桐廬に守たる道中」	
素心愛雲水	素心 雲水を愛し
此日東南行	此の日 東南に行く
笑解塵纓處	笑いて塵纓を解く 処
滄浪無限清	滄浪は無限に清し

### 【詩人小伝】

范仲淹 (989-1052)、字は希文。蘇州呉県（現在の江蘇省蘇州市）出身。大中祥符八年 (1015) の進士。参知政事など、中央官、地方官を歴任した。『宋史』巻 314。

### 【収載】

『范文正公集』巻 3、『全宋詩』巻 166

### 【押韻】

「行」：下平声 12「庚」、「清」：下平声 14「清」（同用）

### 【訳】

もともと雲と水とを好んでおり、  
本日東南の桐廬へと向かうこととなった。  
笑いながら俗塵にまみれた冠の紐を解くとき、  
打ち寄せる青い波はどこまでも澄みきっている。

### 【注】

- 出守：太守として任地へ赴くこと。太守とは地方の長官、ここでは睦州の知事。
- 桐廬：地名。現在の浙江省杭州市桐廬県。北宋の首都汴京から見て東南に位置する。景祐元年 (1034)、范仲淹は睦州（桐廬）に左遷された。補説参照。
- 素心：本心。真心。劉宋・陶淵明「移居二首」其一（『靖節先生集』巻 2）に「素心の人多しと聞き、与に数たびの晨夕を樂う」とある。また『文選』には二例しか見えないが、その二例は梁・江淹「雜體詩・陶徵君田居」（巻 31）、

および劉宋・顔延年「陶徵士誄」（巻 57）であり、この語は陶淵明を連想する言葉といえる。

- 雲水：雲と水。雲も水も流れ行き、形の定まらないものであり、無常の自然を代表する景物であると同時に、詩人のさすらいの身を暗示する。
- 塵纓・滄浪二句：「塵纓」は塵に汚れた冠の紐。俗世や宮仕えの比喩。齊・孔稚珪「北山移文」（『文選』巻 43）に「昔聞く簪を投じて海岸に逸るを、今見る蘭を解きて塵纓に縛せらるるを」とある。「滄浪」は、あおあおとした水。のち、政治の場から離れて暮らす人、あるいはそうした場をイメージさせる語として用いられる。二句は『楚辞』「漁父」に「滄浪の水清ければ、以て吾が纓を濯うべし」とあるのを踏まえている（当該句は『孟子』離婁上にもみえる）。補説参照。
- 無限清：どこまでもはてしなく澄んでいる。唐・李商隠「樂遊原」（『全唐詩』巻 539）に「夕陽無限に好し、只だ是れ黄昏に近し」とある。

#### 【補説】

范仲淹は直諫を繰り返し、何度も左遷の憂き目を見ている。この詩は、仁宗の皇后である郭皇后を廃するか否かの議論に敗れて、景祐元年（1034）、睦州の知事となり、都を離れたときのものである。連作十首の第八首である。連作の構成については、別裁-2「出守桐廬道中」（2）の補説参照。

第三、四句は、波が澄んでいるなら冠の紐を洗いなさい（正しい時代ならば出仕しなさい）と詠う『楚辞』「漁父」を踏まえている。「漁父」では、「滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯うべし」との句が続く。波が濁っているならば自分の足を洗いなさい（誤った時代であれば抗わず官途を去りなさい）との意である。この「漁父」を踏まえつつ、范仲淹は左遷の地で清らかな滄浪と向き合っていると詠っている。正しいはずのこの時代に、彼は中央政界から追放されているのである。范仲淹はこの現状に嘆きを発するのではなく、むしろ笑いながら冠の紐を解くと述べる。これは漁父が当該の歌を歌うに当たり、莞爾として笑った、とあることを想起させる。屈原と同様、君主の側近くから追放された身でありながら、詩人は自らを屈原ではなく、漁父に重ねようとしたのではないか。この地、この時を、官を辞すに相応しいものと認め、左遷された自身を

受け入れたとき、眼前の滄浪は、時代の正しさの象徴ではなく、俗世から離れた理想の山水として、新たな意味を備えて立ち現れてくる。世の流れに抗うことなく受け入れて生きて行こうとする詩人の姿勢は、紛れもなく屈原ではなく漁父のものである。

范仲淹は他にも「桐廬郡に赴き淮上に風に遇う（赴桐廬郡淮上遇風）三首」「蕭灑桐廬郡十絶」など、桐廬に関わる詩を作っており、このことから、范桐廬とも呼ばれる。

（高芝麻子）

## 別裁-2 范仲淹「出守桐廬道中」(2)

「出でて桐廬に守たる道中」	
滄浪清可愛	滄浪 清くして愛すべく
白鳥鑑中飛	白鳥 鑑中に飛ぶ
不信有京洛	信ぜず 京洛有りて
風塵化客衣	風塵 客衣を化すを

### 【収載】

『范文正公集』巻3、『全宋詩』巻166

### 【押韻】

「飛」「衣」：上平声8「微」

### 【訳】

青々とした水の清らかさは愛すべきもので、  
真っ白な鳥は澄み渡る水面を飛んでいく。  
信じられないくらいだ。あの都にあっては、  
風に舞うちりで、旅の装いが黒くなることを。

### 【注】

- 桐廬：別裁-1「出守桐廬道中」(1) 参照。
- 鑑：鏡。ここでは、穏やかな水面を指している。唐・杜牧「金陵」（『全唐詩』

卷 527) に「風 清くして舟 鑑に在り、日 落ちて水 金に浮ぶ」とある。水面は早くから鏡に見立てられており、『墨子』非攻に「君子は水に<sup>かんが</sup>鏡 みずして人に鏡みる」とみえる。

- 京洛：都。俗世界の中心。「風塵」注参照。
- 風塵：ここでは、俗世の汚れの象徴として用いる。晋・陸機「顧彦先の為に<sup>つま</sup>婦に贈る（爲顧彦先贈婦）二首」其一（『文選』巻 24）に「京洛 風塵多し、素衣 化して緇と為る」と都の汚れた風塵で白い衣服が真っ黒になったことを詠む。また、齊・謝朓「王晋安に<sup>こた</sup>訓う（訓王晋安）」（『文選』巻 26）に「誰か能く京洛に久しくせん、緇塵 素衣を染む」とある。いずれも、都にいる違和感、嫌悪感を着物の汚れという目に見えるもので捉える。
- 客衣：旅の装い。

#### 【補説】

十首連作のうちの第九首である。十首はしりとりのような体裁をとり、前の詩の結句にみえる語句を後続の詩の冒頭に置く。本篇の詠い起こし「滄浪」もまた、前の別裁-1「出守桐廬道中」(1)の結句「滄浪無限清」を承けたものである。

連作の前半では、直諫により皇帝の怒りに触れて左遷されたことを述べる。その際、結果として左遷を招いてしまった自身の行為に対し、例えば其二では「一意 千古を懼る、敢て妻子の榮を懷わんや」と詠っているなど、強い矜持の情が吐露されている。しかしながら、連作をよみ進めていくにつれ、こうした高ぶった内面が次第に穏やかになっていく様子が感じられる。「妻子の榮」と詠われる私的な榮達はもとより、「千古」すなわち後世の人々からの評価をもひとまずは措き、赴任先の自然の中において、人生の楽しみを見出していく。連作を締めくくる其十の後半二句では『莊子』秋水にみえる、泥の中に生きる亀の楽しみを説くエピソードを踏まえ、「始めて見る神亀の樂、優優として尾泥に在り」と、政治の中枢から距離を置き、悠々とした自適の生き方に心を沿わせる。

本詩では、特定の色彩を喚起させる「滄浪」「白」「風塵」の語を用いつつ、赴任先である桐廬と都を描き分ける。青々とした「滄浪」の穏やかな水面、そ

こに飛ぶ白い鳥というように清らかな色で赴任先を描く。いっぽうの都は、黒を連想させる言葉を用いて、穢れた空間として描かれる。桐廬の風景を「愛すべく」と冒頭句に詠ったように、こうした色彩の対比からも、詩人が赴任先の環境に心を寄せていることが窺われる。

(鄭月超)

### 別裁-3 歐陽脩「夜夜曲」

や きょく  
「夜夜曲」

浮雲吐明月

流影玉階陰

千里雖共照

安知夜夜心

ふうん めいげつ は  
浮雲 明月を吐き

りゅうえい ぎょくかいかげ  
流影 玉階陰る

せんり とも て いえど  
千里 共に照らすと 雖も

いづく し や や こころ  
安んぞ知らん 夜夜の心

#### 【詩人小伝】

歐陽脩 (1007-1072)、字は永叔、号は醉翁、晩年は六一居士と称した。吉州廬陵（現在の江西省吉安市）の人。天聖八年 (1030) の進士。西京留守推官となり、翰林学士・枢密副使・参知政事などの要職を歴任、政界の中枢で活躍した。『宋史』巻 319。

#### 【収載】

『居士外集』巻 1、『全宋詩』巻 296

#### 【押韻】

「陰」「心」：下平声 21「侵」

#### 【訳】

夜空を漂う雲の切れ目から明るい月が顔を出すと、  
月の光が玉のきざはしに影を作る。  
遠く離れている私たち二人を月は照らすけれど、  
毎夜思い続ける私の心を、どうしてわかってくれるでしょう。

#### 【注】

- 夜夜曲： 楽府の雑曲歌辞。北宋・郭茂倩『樂府詩集』 卷 76「夜夜曲」 解題に、「『夜夜曲』は梁の沈約の作る所なり。梁『樂府解題』に曰く、『夜夜曲』は独り処るを傷むなりと」とある。『樂府詩集』は沈約の五言詩二首を収めるが、その第一首「北斗 欄干に去り、夜夜 心独り傷む。月輝いて横ざまに枕を射し、灯光 半ば床を隠う」を、『玉台新詠』 卷 10 では梁の簡文帝の「雜題二十一首」の其五として収載する。「夜夜」は毎晩の意。唐・李商隱「常娥」（『全唐詩』 卷 540）に「常娥は応に靈藥を偷みしを悔ゆるべし、碧海 青天 夜夜の心」とある。
- 吐明月：「吐」はここでは「出る」「現れる」の意。流れる雲の切れ間から顔を出す月をいう。擬人法的用法を用いている。唐・韋應物「同徳寺雨後元侍御李博士に寄す（同徳寺雨後寄元侍御李博士）」（『全唐詩』 卷 187）に、「喬木 夏涼を生じ、流雲 華月を吐く」、唐・杜甫「月」（『全唐詩』 卷 230）に、「四更 山は月を吐き、残夜 水は楼に明らかなり」とある。
- 流影：雲間から差し込む月光。魏・曹植の「七哀」（『文選』 卷 23）に「明月 高楼を照らし、流光 正に徘徊す」とあり、梁・元帝「關山月」（『樂府詩集』 卷 23）に「月中 桂樹を含み、流影 自ずから徘徊す」とある。
- 玉階：玉で飾った美しい 階<sup>きざはし</sup>。「玉階」には、もの思う女性のイメージが託された。齊の謝朓に始まる楽府題に「玉階怨」があり、恋する女性の、相手を想う気持ちがうたわれている。
- 夜夜心：毎夜つらい気持ちでいること。「夜夜曲」の注を参照。

### 【補説】

この詩は『居士外集』の「玉台体に擬す（擬玉臺體）七首」の第五首にあたる。詩題にいう「玉台体に擬す」とは、陳・徐陵が撰した『玉台新詠』に収録される詩のスタイルにならっている、という意味である。『玉台新詠』は男女の情愛をつづった、繊細で艶麗な詩風を特徴とする。欧陽脩のこの七首の連作詩は、いずれも遠く離れた恋人（夫）を慕う気持ちが描かれる。

一句、二句は眼前の風景を述べ、雲の動きと月光の動きを連動させる。雲に覆われていた月が顔を出したことによって、月の光がきざはしに影を作り、主人公の女性は遠く離れた相手を想う気持ちを募らせる。三句、四句は主人公の



複雑な胸の内を描く。「安知夜夜心」と切ない心情を訴えたい相手は月とも夫ともとれるが、ここではあえて限定して読む必要はないのではないだろうか。うらみを述べたいのは夫けれども、そのきっかけを作ったのは月なので月に繰言を述べている、と解釈したい。離れた場所にいる二人を照らす月、というモチーフは古くから用いられ、『文選』巻30にも、劉宋・鮑照「月を城西門の解中に翫ぶ（翫月城西門解中）」に「三五 二八の時、千里 君と同じくす」とある。

本詩の制作時期は、題下の注に「西京の作。天聖九年に起り明道二年に尽く」とあることから、洪本健『歐陽脩詩文集校箋』（上海古籍出版社 2012）は、北宋の明道元年（1032）、歐陽脩が洛陽の錢惟演の幕府にいた時の作であろうとする。

なお梅堯臣にも、七首連作の「玉台体に擬す（擬玉臺體）」（『宛陵集』巻2）があり、その第五首の「夜夜曲」は、

情来不自理	情来たりて自ずから理めず
明月生南樓	明月南樓に生ず
坐感昔時樂	坐ろに感ず昔時の樂しみ
翻成此夜愁	翻りて成す此の夜の愁い

と詠う。この連作詩の七首の詩のタイトルがすべて歐陽脩のものと同じであることから、同時期に唱和した作であろう。

（森山結衣子）

## 別裁-4 歐陽脩「自菩提歩月歸廣化寺」

「菩提自り月に歩みて廣化寺に歸る」	
春巖瀑泉響	春 巖 瀑泉響き
夜久山已寂	夜久しくして山已に寂かなり
明月淨松林	明月 松林淨く
千峯同一色	千峰 同一色

【収載】

『居士集』巻 1、『全宋詩』巻 282

【押韻】

「寂」：入声 23「錫」、「色」：入声 24「職」（通押）

【訳】

春の巖より流れ落ちる滝は響き、  
夜も更け、山々は静けさに包まれた。  
月の光に洗われて松の木々は清らかに、  
たたなわるあまたの峰々はすべて同じ色。

【注】

- 菩提：梵語 bodhi の音訳で仏の悟りの意。ここでは龍門にあった寺院の名。北宋・釈贊寧『宋高僧伝』宋西京天宮寺義莊伝に「塔を龍門菩提寺の西に遷す」とみえる。「上方閣」はその菩提寺の楼閣であろう。本篇を含む「龍門に遊び題を分かつ（遊龍門分題）十五首」連作に「上方閣」「晩に菩提上方に登る」の二篇がある。
- 歩月：月明かりのもと歩く。『南史』王藻伝に「夜に至り、月に歩みて琴を弄す」。唐・杜甫「恨別」（『全唐詩』巻 226）に「家を思い月に歩みて清宵に立ち、弟を憶い雲を看て白日に眠る」。
- 広化寺：龍門の寺院。「龍門に遊び題を分かつ（遊龍門分題）十五首」のなかに「広化寺に宿す」あり。
- 春巖：氷雪の解けはじめた春の岩山。北宋・梅堯臣「春日 龍門山の寺に遊ぶ（春日遊龍門山寺）」（『宛陵集』巻 1）に「陰壑 泉初めて動き、春巖 氣浮かばんと欲す」。
- 明月一句：月の光を清浄なものとして詠う。梁・沈約「王中丞思遠の月を詠ずるに応ず（應王中丞思遠詠月）」（『文選』巻 30）に「月華 静夜に臨み、夜静かにして氛埃滅す」。唐・杜甫「秋日 寄せて鄭監の湖上亭に題す（秋日寄題鄭監湖上亭）三首」其一（『全唐詩』巻 231）に「月は浄し庾公の楼」。本詩と同じく松林の清浄を詠うものに、北宋・司馬光「侍讀王學士挽辭二首」其二（『温国文正司馬公文集』巻 9）に「秋色 松林浄し」。
- 千峯一句：「千」と「一」の対比。唐・儲光羲「田家雜興八首」其三（『全唐

詩』卷 137) に「落日 秋山を照らし、千巖 同一色」。

### 【補説】

「龍門に遊び題を分かち十五首」の第七首。この連作の題下注によれば、明道元年(1032)の作。時に歐陽脩は西京留守推官として洛陽にあった。龍門は洛陽の南、伊川をはさんで西に龍門山、東に香山が向き合い、北魏以来、多くの仏寺が建てられた仏教聖地の一。ここを友人らとともに訪れた際、十五篇に詠みわたったなかの一篇。いまその題目を挙げれば、「山に上る」、「山を下る」、「石楼」、「上方閣」、「伊川にて舟を泛ぶ」、「広化寺に宿す」、「菩提自り月に歩みて広化寺に帰る」(本篇)、「八節潭」、「白傳墳」、「晩に菩提上方に登る」、「山槎」、「石笋」、「鴛鴦」、「魚罾」、「魚鷹」。

春、雪解けの瀑布が高い巖から流れ落ちる。それを「寂」ということばで表すのは、瀑布の響きをも包み込んで山域全体をおおう静寂の氣に作者自身が感応したということであろう。

後半二句は、その静寂を清浄に転化して視覚からとらえる。月のさやかな光に浄められる松の木々、その松におおわれて連なる峰々がすべて一つの色に染め上げられる。そのとき詩人はそこに清浄の靈域を見いだしている。

(和田英信)

## 別裁-5 歐陽脩「晩過水北」

<sup>ばん すいぼく す</sup>  
「晩に水北を過ぐ」

寒川消積雪

<sup>かんせん せきせつ き</sup>  
寒川 積雪消え

凍浦漸通流

<sup>とうほ しょうや つうりゅう</sup>  
凍浦 漸く通流す

日暮人歸盡

<sup>ひ く ひとかえ つ</sup>  
日 暮れて人帰り尽き

沙禽上釣舟

<sup>さきん ちょうしゅう のぼ</sup>  
沙禽 釣 舟 に上る

### 【収載】

『居士集』卷 10、『全宋詩』卷 291

### 【押韻】

「流」「舟」：下平声 18「尤」

【訳】

寒々とした川べりも降り積もった雪が消え、  
凍り付いた岸边にもしだいに水が流れるようになった。  
日暮れに人々はみな帰ってしまい、  
砂州にいた鳥が釣り舟に停まっている。

【注】

- 寒川：寒々とした川べり。唐・李白「秋浦歌十七首」其十四（『全唐詩』巻 167）に「<sup>だんろう</sup>赧郎 明月の夜、歌曲 寒川を動かす」。
- 積雪：つもった雪。後漢・班彪「北征賦」（『文選』巻 9）に「雲霧の杳杳たるを飛ばし、積雪の<sup>かいかい</sup>皚皚たるを渉る」。
- 凍浦：凍りついた水辺。唐・王維「虞部蘇員外の藍田別業を過ぐるも留まられざるの作に酬ゆ（酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作）」（『全唐詩』巻 126）に「漁舟 凍浦に<sup>にかわ</sup>膠し、獵火 寒原を焼く」。
- 通流：川の水が流れること。晋・孫楚「石仲容の為に孫皓に与うる書（爲石仲容與孫皓書）」（『文選』巻 43）に「<sup>ふか</sup>濬く河洛を決すれば、則ち百川通流す」。
- 沙禽：砂州にいる水鳥。欧陽脩「伊川に舟を泛ぶ（伊川泛舟）」（『居士集』巻 1）に「沙禽 独り人を避け、飛び去る青林の<sup>こずえ</sup>杪」。

【補説】

「帰尽」の語を用い、人のいなくなった川べりの情景を詠った作品に、唐・趙嘏「池上」（『全唐詩』巻 550）の「猶お漁舟の江岸に<sup>つな</sup>繋ぐ有り、故人帰り尽きて独り何の情あらん」がある。夕暮れ、無人の水辺にある舟という描写は、唐・韋応物的「滁州西澗」（『全唐詩』巻 193）の「春潮雨を帯びて晚来急なり、野渡人無く舟自ずから横たわる」を少し連想させる。しかし、「滁州西澗」詩が「春」と明言して詠うのに対して、「晚過水北」詩はまだ春の景色とは言い難い。しかしその中であって、「消積雪」「漸通流」と、緩やかながらも確実な、春の兆しを見い出している。このような人がいなくなる、という状況を詠った詩はなぜか冬の終わりから、春のはじめであることが多い。唐・皎然「冬日顔延之明府の撫州にて叔父に<sup>あ</sup>覲うを送る（冬日送顔延之明府撫州覲叔父）」（『全

唐詩』巻 818) には、「日暮れて人帰り尽き、山空しく 雪未だ消えず」とあり、  
 歐陽脩よりも下の世代であるが、北宋・蘇軾「新年五首」其一（『合注』巻 40）  
 には、「小市 人 帰り尽き、孤舟 鶴 踏みて翻る」とある。冬であれば、はじめ  
 から外出をしない。夏であれば、日が暮れてもなお外にいる、それゆえに、春  
 の夕暮れがもっとも人のいない寂しさを詠いやすいのだろうか。

歐陽脩は他に「魚鷹」（『居士集』巻 1）という詩で、鳥（ここでは魚鷹〔ミ  
 サゴ〕）と日暮れと舟を詠っている。

日色弄晴川	日色晴川を弄し
時時錦鱗躍	時時に錦鱗躍る
輕飛若下韝	輕く飛びて <sup>ゆごて</sup> 韝 に下りるが若く
豈畏風灘惡	豈に風灘の惡しきを畏れん
人歸晚渚靜	人歸りて晚渚靜かに
獨傍漁舟落	獨り漁舟に傍いて落つ

こちらは、とくに季節を感じさせるものは詠み込まれていない。

洪本健『歐陽脩詩文集校箋』（上海古籍出版社 2012）は、制作時期を明道年  
 間（1032-1033）から景祐年間（1034-1038）の間であろうと推定する。また、水  
 北は洛水の北を指しているようだと言及する。

（佐野誠子）

## 別裁-6 歐陽脩「遠山」

えんざん 「遠山」	
山色無遠近	さんしよく えんきん な 山 色 遠近無く
看山終日行	やま み しゅうじつ ゆ 山を看て 終日行く
峯巒隨處改	ほうらん ところ したが あらた 峰巒 処 に 随 いて 改 まるも
行客不知名	こうかく な し 行客 名を知らず

【収載】

『居士集』巻 10、『全宋詩』巻 291

【押韻】

「行」：下平声 12「庚」、「名」：下平声 14「清」（同用）

【訳】

山の景色に惹かれて、進む道のりを気にもせず、  
山を眺めながら一日中行き進む。  
峰々は、こちらの見る地点に従って姿かたちを変えていくが、  
旅人はその名をついに知らぬのだ。

【注】

- 遠山：遠くに見える山。唐・李白「杜陵絶句」（『全唐詩』巻 180）に「秋水落日に明るく、流光 遠山に滅す」とある。
- 山色：山の景色。北宋・蘇軾「湖上に飲す 初め晴れ後に雨ふれり（飲湖上初晴後雨）二首」其二（『合注』巻 9）に「水光 潋灩として 晴れ方に好く、山色 空濛として 雨 亦奇なり」とある。
- 無遠近：「遠近」は、ここでは道程のこと。「無遠近」は、進む距離を気にしない、構わないという意。唐・錢起の「独り覆釜山に往く 郎士元に寄す（獨往覆釜山寄郎士元）」（『全唐詩』巻 236）に「賞心 遠近無く、芳月 登望するに好し」とある。また北宋・蘇軾の「李彭年<sup>とも</sup>と崔岐の歸すに二曲を送り、馬上にて口占す（與李彭年同送崔岐歸二曲馬上口占）」（『合注』巻 49）に、「暮山を貪り看れば 遠近を忘れ、強いて歸客に陪して更に流連す」とある。
- 峰巒：山のみね。
- 随处改：山の姿が見る側のいる場所に依じて変化するの意。梅堯臣「魯山山行」（『宛陵集』巻 7）に「好峰 処に随いて改まり、幽径 独り行きて迷う」とある。
- 行客：旅の途上にある人。

【補説】

本詩には固有名詞や、心情を表す語句が全く見えないため、一体どのような状況を詠んだものか判然としない。「遠山」という詩題から、遠くに聳える山へ向かって、徐々に接近していく過程を描いたと分かるのみである。

だがここでは、第一句の「無遠近」を、注に挙げた錢起などの用例を基に、

山の景色に心惹かれて幾ら進んだかを気にしない、詩人の好奇心を表すものとして解釈した。銭起は他に、「輞川に遊び 南山に至りて谷口の王十六に寄す（遊輞川至南山寄谷口王十六）」（『全唐詩』巻 236）でも「山色 遠きを厭わず、我が行 処に随いて深まる」と、本詩と似た詩句を詠んでいる。

第二句で終日山を眺めつつ先を進むというが、それは単に旅の風景をスケッチしたのではなく、山の風情に惹かれているからこそその表現である。続く第三句で、刻々と変化しゆく山々の情景で以て山へと徐々に近づく過程を表すが、そこに詩人の尽きぬ興味が込められている、と考えられる。そして結句では、それほどにも心惹かれた山であるのに、実はその名を知らないのだ、と種明かしをする。偶然、その山と出会っただけだから。そのために、詩題で「遠山」と言い、山を山、峰を峰巒と呼ぶ外ないのである。山自体への関心とは対照的な素っ気ないもの言いが、詩に諧謔性をもたらしている。

本詩について、洪本健『欧陽脩詩文集校箋』（上海古籍出版社 2012）は、景祐四年（1037）、許州（現在の河南省）から左遷先の夷陵（現在の湖北省宜昌市）へ向かう途上で詠んだかと推測する。そのように限定する必要はないと考えるが、仮にそうだとしても、直接的な感情表現がない以上、「自身の挫折を歎く」「異郷の地に向かう不安を詠う」といった解釈は難しい。寧ろ、左遷地へ続く山並みにすら持ち前の好奇心を以て接した、という先に述べた解釈の方が妥当ではないか。その中に、欧陽脩の揺らがぬ芯の強さ、度量の大きさが見いだせよう。

（加納留美子）

## 別裁-7 欧陽脩「和梅聖俞杏花」

ばいせいゆ きょうか わ  
「梅聖俞の杏花に和す」

誰道梅花早	たれ い ばい かはや 誰か道う 梅花早しと
殘年豈是春	ざんねん あ こ はる 殘年 豈に是れ春ならん
何如豔風日	なん し えんぶう ひ 何ぞ如かん 豔風の日に
獨自占芳辰	ひとり ほうしん し 独自 芳辰を占むるに

【収載】

『居士外集』巻 6、『全宋詩』巻 301

【押韻】

「春」：上平声 18「諄」、「辰」：上平声 17「真」（同用）

【訳】

梅は開花が早いと言うのは誰か、  
梅が咲くのは年の暮れ、春ではないだろう。  
この心地よい春風の吹く花の日和に、  
春の時間を独占している杏花には、梅は敵わないだろう。

【注】

- 梅聖俞：梅堯臣（1002-1060）、字は聖俞。宣城（現在の安徽省）の人。北宋の代表的詩人。欧陽脩の親友であり、両者の唱和の作は少なくない。
- 残年：年の暮れ。年末。
- 艷風：花の香りを運ぶ春の風。北宋・賀鑄「謁金門」詞（明・陳耀文編『花草粹編』巻 6）に「燕子 泥を分け蜂は蜜を醸す、遅遅たる艷風の日」とある。
- 独自：自分一人で。
- 占芳辰：春の日和を独占しているの意。芳辰は芳しい春の時節を表す。後蜀・薛昭蕴「喜遷鶯」詞（『全唐詩』巻 894）に「九陌喧しく、千戸啓き、満袖桂香 風細やかなり。杏園歡宴 曲江の浜、此れより芳辰を占む」とある。

【補説】

洪本健『欧陽脩詩文集校箋』（上海古籍出版社 2012）は、本詩を明道元年（1032）の作とする。梅堯臣の同年の作に「初めて杏花を見る（初見杏花）」（『宛陵集』巻 1）に「春風の遍なるを待たず、煙林に独り早く開く。浅紅 醉粉を欺き、肯えて信ず 江梅有るを」がある。梅堯臣は、春風の立たぬうち、杏花が真っ先に花開き、そのうっすらとした紅を見て、野の梅が咲いたのかと思った、という。本詩がこれを意識した作だとすれば、「君（梅堯臣）は杏の花をみて、早く咲いたから梅かと思ったというが、梅は年の終わりに咲くもので決して早くはない、杏は華やかな春の盛りに咲くからこそ素晴らしいのではないか」という意味に解することができるだろう。



(大戸温子)

## 別裁-8 歐陽脩「和聖俞百花洲」

「せい ゆ ひゃっかしゅう わ聖俞の百花洲に和す」

野岸溪幾曲

や がん けい いくきよく野岸 溪 幾 曲

松蹊穿翠陰

しょうけい すいいん うが松 蹊 翠陰を穿つ

不知芳渚遠

ほうしよ とお し芳渚の遠きを知らず

但愛綠荷深

た りよくか ふか あい但 緑荷の深きを愛す

### 【収載】

『居士外集』巻6、『全宋詩』巻301

### 【校異】

「松」、『居士外集』には「一作沿」との注記あり。

### 【押韻】

「陰」「深」：下平声 21「侵」

### 【訳】

野原の岸辺に沿って、小川が何回も曲がりくねっている。

松の木の下細道は緑の木陰をつらぬく。

美しい小島まで、どのぐらいの距離があるのかは気にしない、

ただひたすらに、深く生い茂る蓮葉を愛するのだ。

### 【注】

- 聖俞：梅堯臣の字。別裁-7「和梅聖俞杏花」の注を参照。
- 百花洲：川の中州にある花園、遊詠したところの名。各地に「百花洲」と呼ばれた場所が存在したようだが、この詩の舞台は鄧州（現在の河南省鄧州市）。『大清一統志』巻211「南陽府志」には「百花洲、鄧州城東南に在り、宋時州守范仲淹 嘗みて遊詠の所と為す」とある。補説参照。
- 野岸：郊外の岸辺。唐・杜甫「柏学士的林居に寄す（寄柏學士林居）」（『全唐詩』巻222）に「赤葉 楓林 百舌鳴き、黄泥 野岸 天鷄舞う」とある。
- 松蹊：松の下的小道。

- 翠陰：緑の樹影。
- 芳渚：花が咲いてる美しい小島、あるいは川べり。唐・皎然「嚴明府の関に入り 黎京兆に謁するを送る（送嚴明府入關謁黎京兆）」（『全唐詩』巻 819）に「潮廻りて芳渚没し、花落ちて昼山空なり」とある。
- 緑荷：緑色の蓮の葉。唐・杜牧「齊安郡中偶題二首」其一（『全唐詩』巻 522）に「多少の緑荷 相寄りて恨み、一時 首を回らせて 西風に背く」とある。また、歐陽脩の同年の作「魚」（『居士外集』巻 6）には「岸辺の人影に驚き還た去り、時に緑荷の深き処に跳ぶ」とある。

【補説】

『居士外集』の題下注に「宝元二年作」とある。本詩は宝元二年（1039）、歐陽脩が鄧州に赴いた際に梅堯臣の詩に和した二首のうちの第一首。南宋・胡柯の「歐陽文忠公年譜」によると、宝元二年（1039）の夏、梅堯臣は襄城県令に任ぜられ、新任の鄧州知州謝絳とともに鄧州へ赴いた。当時、乾徳県令であった歐陽脩は鄧州へ梅、謝を訪ね、ともに十数日間を過ごした。その時三人は鄧州の名所である百花洲を遊覧して、詩を唱和した。

唱和の元となった梅堯臣詩について、洪本健『歐陽脩詩文集校箋』（上海古籍出版社 2012）は、「『梅集編年』巻九有是年詩『泛舟城隅呈永叔』、此即欧之和詩」と注する。『梅集編年』とは、朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社 2006）のことで、宝元二年の作として当該詩が収録され、歐陽脩詩の作年と一致する。

梅堯臣の「城隅に舟を泛ぶ 永叔に呈す（泛舟城隅呈永叔）」（『宛陵集』巻 6）は五言絶句二首からなり、韻字は同じでないものの、二人の詩は同じように城、溪水、緑荷、雨後と暮色について言及しているため、ともに百花洲に遊覧した時の作品である可能性が高い。謝絳の作品は亡佚している。

其一

藤竹繞城陰	藤竹 城陰を繞り
煙梢拂濠水	煙梢 濠水を払う
山禽時一鳴	山禽 時に一たび鳴き
楚客孤舟裏	楚客 孤舟の裏

其二

孤舟穿綠荷	孤舟 緑荷を穿ち
獵獵雨新過	獵獵として雨新たに過ぐ
誰思暮江上	誰か思わん 暮江の上
只尺採蓮歌	只尺に採蓮の歌あるを

其一の押韻は、「水」：上声 5「旨」、「裏」：上声 6「止」（同用）。其二の押韻は、「過」：下平声 8「戈」、「歌」：下平声 7「歌」（同用）。歐陽脩の和作の第二首は以下の通りである。

荷深水風闊	荷 深く水風 闊く
雨過清香發	雨過ぎて清香発す
暮角起城頭	暮角 城頭より起こり
歸橈帶明月	歸橈 明月を帶ぶ

こちらの押韻は、「発」、「月」：入声 10「月」である。梅詩は、第一首結句中にある「孤舟」の語を第二首の詠い起こしに用いる。また、欧詩の第二首は、第一首末尾の「荷深」を承けて第二首を詠い起こしている。このような末尾字をそのまま次の詩の頭に用いる形式を蟬聯体という。このように体裁面でも両者の詩は類似する。

鄧州での会合後、三人は手紙のやりとりの中でもしばしば百花洲の景色と歓会の情景を回想した。詩人たちにとって、百花洲の歓会は大切な友人と一緒に過ごした貴重で、大切な思い出だったのだろう。

（許喬）

## 別裁-9 劉敞「雨後回文」

「雨後回文」	
綠水池光冷	りよくすい ちこう ひやや 緑 水 池光 冷 かにして
青苔砌色寒	せいたい せいしょく さむ 青苔 砌 色 寒し
竹深啼鳥亂	たけ ふか ていちょう みだ 竹 深く 啼鳥 乱れ
庭暗落花殘	にわ くら らっか ざん 庭 暗く 落花 残す

【詩人小伝】

劉敞 (1019-1068)、字は原父、号は公是。慶暦年間 (1041-1048) の進士。吏部南曹、知制誥などを歴任。経学者として知られ、『春秋権衡』、『春秋伝』、『七経小伝』などを著した。『宋史』巻 319。

【収載】

『公是集』巻 27、『全宋詩』巻 487

【押韻】

「寒」「残」：上平声 25「寒」

【訳】

緑の水を湛えた池の光はひんやりとして、  
 青い苔をつけた石だたみの色あいは寒々しい。  
 竹林は奥深く、その中で鳴く鳥たちがざわめき、  
 庭はほの暗く、そこに散り落ちた花びらが点々と浮かび上がる。

【注】

- 回文：頭から読んでも、末尾から読んでも、意味が通じるように作られた文のこと。詩の場合、なおかつ押韻等の形式が守られている必要がある。
- 緑水：ここでは池の水を指す。また、「緑水」は、隠棲、超俗の象徴としても用いられる。晋・潘岳「秋興賦」（『文選』巻 13）に「亀 骨を宗祧に祀られ、身を緑水に反さんことを思う」とある。
- 池光：池の水面に映る光。唐・張籍「早春閑遊」（『全唐詩』巻 384）に「樹影 新しくして猶お薄く、池光 晩れて尚お寒し」とある。
- 竹深：竹が茂っているさま。「深」は、とりわけ竹むらの奥深いさまをいう。唐・岑参「丘中春臥して王子に寄す（丘中春臥寄王子）」（『全唐詩』巻 200）に「竹深く暮鳥 喧しく、花欠けて春山 露<sup>あら</sup>わる」とあり、あちらこちらで鳴く鳥の声によって、竹林の奥行きをより一層意識させている。

【補説】

雨がやみ、まだ落ち着きを取り戻していない周囲の情景が詠われる。前半二句では、目に映る「池光」「砌色」が「冷」やか、「寒」しと感覚的に捉えなおされている。後半二句では、鳥と花の空間を「深」く、「暗」くと詠む。四句に

散りばめられている景物そのものよりも雨が上がったあとの冷え込んだ空気あるいは、夕闇に包まれたあたり一帯のほの暗い雰囲気印象が残る詩である。

逆から読んだとき、同じ二十の文字でありながらも、言葉の配置が異なるため、イメージされるものの鮮やかさが異なる。特に「鳥」、「花」を含む二句について、重なりあう鳥の鳴く声、点々と地面から浮かび上がる花びらによって、より一層竹むらの奥深さ、庭のほの暗さを意識させる元の詩のほうが、喚起性が強いように感じる。

【倒読】

残花落暗庭	ざんか あんてい お 残花は暗庭に落ち
亂鳥啼深竹	らんちょう しんちく な 乱鳥は深竹に啼く
寒色砌苔青	かんしよく せいたい あお 寒色 砌苔 青く
冷光池水緑	れいこう ちこう みどり 冷光 池水 緑なり

【押韻】

「竹」：入声 1 「屋」、「緑」：入声 3 「燭」（通押）

（鄭月超）

## 別裁-10 司馬光「曉霽」

ぎょうせい 「曉霽」	
夢覺繁聲絶	ゆめ さ はんせい た 夢 覚むれば繁声絶え
林光透隙來	りんこう すき とお き 林光 隙を透りて來たる
開門驚烏鳥	もん ひら うちよう おどろ 門を開けば 烏鳥を 驚かし
餘滴墮蒼苔	よてき そうたい お 余滴 蒼苔に墮つ

【詩人小伝】

司馬光 (1019-1086)、字は君実、号は迂叟。父の任地だった光州（現在の河南省信陽市潢川県）に生まれる。本籍は陝州夏県（現在の山西省運城市夏県）涑水郷そくすいの人で、涑水先生とも呼ばれた。史書『資治通鑑』の著者。宝元元年 (1038) 進士に及第、地方官を勤めた後、翰林学士、尚書左僕射兼門下侍郎な

どの要職を歴任。新法・旧法の争いでは、旧法党の領袖として王安石と対立した。諡は文正、温国公を追贈された。『宋史』巻 336。

【収載】

『温国文正司馬公文集』巻 6、『全宋詩』巻 502

【押韻】

「来」「苔」：上平声 16「咍」

【訳】

夢から覚めると、夜来降っていた雨音はやみ、  
隙間から木漏れ日が射し込んでいる。  
扉を開けると、鳥が驚いて枝から飛び立ち、  
葉に残った雨水のしずくが青い苔の上に落ちる。

【注】

- 曉霽：「霽」は雨などがやんで、空がすっきり晴れることを言う。北宋・黄庭堅「溪上吟」の序（『山谷集外集』巻 1）に「新雨ありて、天<sup>は</sup>霽る」とある。
- 繁声：音がやかましいさま。ここでは雨音がしきりであることをいう。唐・白居易「韓侍郎の苦雨に和す（和韓侍郎苦雨）」（『全唐詩』巻 442）に、「潤気 柱礎に凝り、繁声 瓦溝に注ぐ」とある。
- 林光：木々の間から差し込む木漏れ日。北宋・欧陽脩「太清宮に遊び城を出でて馬上に口占す（遊太清宮出城馬上口占）」（『居士集』巻 14）に「鵲<sup>からす</sup> 鳴き 日 出でて林光動く」とある。
- 鳥鳥：カラス。
- 余滴：残っている滴。ここでは、葉にたまった雨滴。唐・元稹「雨後の花を賦し得たり（賦得雨後花）」（『全唐詩』巻 409）に、「余滴 織蕊に下り、残珠 細枝に墮つ」とある。

【補説】

「曉霽」とは「雨上がりの晴れ渡った朝」の意。この詩はその情景を、「雨」という語を用いずに表している。「繁声」はザアザアと落ちる雨滴の音で、夢から覚めた時には既に消えている。夢見心地で聞いていた、あのうるさいほどの雨音は、夢だったのだろうか、それとも現実だったのだろうか。それを確か

めようとして、扉を開くと、鳥が驚いて木から飛び立つ。枝葉はまだ濡れていて、「余滴」が青い苔の上に落ちてきた。「繁声」が夢でなかったのを証し立てるのが、ポタリと落ちる「余滴」であることに、この詩の面白さがあるのではないか。

雨上がりの朝を描いた作品と言えば、唐・孟浩然の「春暁」(『全唐詩』巻160)がまず思い浮かぶ。「春暁」では、「啼鳥を聞く」「夜来風雨の声」と、聴覚を中心に景物を捉えており、音によって落花を連想する趣向になっている。

いずれも雨上がりの朝を描きながら、一方はその清々しさを、一方は春のけだるさを表現している。同じ趣向の詩として別裁-48 利登「春日」も参照されたい。

(松原功)

別裁-11 王安石「題齊安壁」→王安石-6

別裁-12 王安石「再題南澗樓」→王安石-23

別裁-13 王安石「南浦」→王安石-24

別裁-14 王安石「溝港」→王安石-3

別裁-15 王安石「梅花」→王安石-65

別裁-16 王安石「江上」→王安石-27

別裁-17 王安石「秣陵道中」→王安石-31

別裁-18 王安石「雜詠」(1)→王安石-38

別裁-19 王安石「雜詠」(2)→王安石-39

## 別裁-20 文同「蓼嶼」

「蓼嶼」

孤嶼紅蓼深

清波照寒影

時有雙鷺鷥

飛來作佳景

孤嶼 紅 蓼 深く

清波 寒影を照らす

時に双鷺鷥有りて

飛び来たりて佳景を作す

### 【詩人小伝】

文同 (1018-1079)、字は与可。梓州永泰（現在の四川省塩亭県）の人。陵州（四川省眉山市）、洋州（陝西省洋県）の知県を歴任し、湖州（浙江省湖州市）に転じる前に亡くなった。蘇軾の母方の血縁にあたり、蘇軾兄弟と親しく交わった。また画をよくすることでも知られ、特にその墨竹は蘇軾をはじめ当時の文人の絶賛するところであった。『丹淵集』附載の北宋・范百禄「新知湖州文公墓誌銘」のほか、『宋史』巻 443 に伝がある。

### 【収載】

『丹淵集』巻 15、『全宋詩』巻 445

### 【押韻】

「影」「景」：上声 38「梗」

### 【訳】

池の小島は紅く色づくタデに深々と覆われ、

清らかな波が寒々としたその影を映す。

おりしもつがいのシラサギが、

飛び来たってみごとな景色を作る。

### 【注】

- 蓼嶼：タデの覆う池の小島。「蓼」はタデ。沙質の河原およびその近辺に群生し、秋に花をつけ、さらに晩秋には鮮やかに紅葉する。
- 孤嶼：水のなかにぽつんとある中州、島。劉宋・謝靈運「江中の孤嶼に登る（登江中孤嶼）」（『文選』巻 26）に「流れを乱りて孤嶼に趨けば、孤嶼 中川



に<sup>うるわ</sup>媚し」。ここでは詩題にいう蓼嶼をいう。

- 紅蓼：タデの花はごく小さく、ここでは秋の終わりから初冬にかけて色づいたその葉をいうものであろう。唐・元稹「楽天の秋に曲江に題すに和す（和楽天秋題曲江）」（『全唐詩』巻 401）に「綿綿たる紅蓼の水、揚揚たる白鷺鷥」。
- 寒影：水に映る寒々としたすがた。第一句のタデに深く覆われた小島をいう。
- 双鷺鷥：つがいのシラサギ。唐・白居易「箬峴東池」（『全唐詩』巻 439）に「中宵 火を把りて行人発し、双棲の白鷺鷥を驚起せしむ」。
- 佳景：美しい景色、風致。唐・李白「族姪評事黯の昌禪師の山池に遊ぶに同ず（同族姪評事黯遊昌禪師山池）二首」其二（『全唐詩』巻 179）に「去るを惜しみて佳景を愛す、烟蘿 暝ならんと欲する時」。

#### 【補説】

洋州で詠まれた「守居園池雜題三十首」の第十一首である。南宋の家誠之が撰した「石室先生年譜」に依れば、文同は熙寧八年（1075）秋、知洋州として赴任した。そのおり知事の居宅の園池を三十首に詠みわたった中の一首。蘇軾に「文与可の洋川園池に和す（和文與可洋川園池）三十首」（『合注』巻 14）の七言絶句があり、蘇轍にも和詩がある。

「孤嶼」という語を目にすれば、まず想起されるのが注に引いた謝靈運の「江中の孤嶼に登る」詩であろう。謝詩は山中の川の中州だが、ここでは園庭中の池の小島。ここに連作三十首に共通する「見立て」の発想が端的に表れている。知事の居宅を中心とする園庭。その限定された空間のなかに大自然が盆栽のように写し取られている。謝靈運は山野を跋涉し、川を渡って「孤嶼に登る」のだが、文同は、おそらくは座敷に腰を下ろしたまま、窓から庭の光景を眺める。その結果、詩は視覚イメージで一貫する。小さくしつらえられた晩秋から初冬にかけての寒々しい景色のなか、タデとシラサギの鮮やかな色彩の対比として。

（和田英信）

## 別裁-21 文同「望雲樓」

ぼううんろう  
「望雲樓」

巴山樓之東

秦嶺樓之北

樓上捲簾時

滿樓雲一色

はざん ろう ひがし  
巴山は樓の東  
しんれい ろう きた  
秦嶺は樓の北  
ろうじょう すだれ ま とし  
樓上 簾を捲く時  
まんろう くも いっしょく  
滿樓 雲 一色

### 【収載】

『丹淵集』巻 15、『全宋詩』巻 445

### 【押韻】

「北」：入声 25「徳」、 「色」：入声 24「職」（同用）

### 【訳】

巴山は樓の東のかたに聳え、  
秦嶺は樓の北のかたに連なる。  
樓の上にあってその簾を巻き上げる時、  
樓を包み込むように雲が広がっている。

### 【注】

- 巴山：四川と陝西の省界で湖北まで連なる山脈・大巴山のこと。唐・李白「荊門にて舟を浮かべて蜀江を望む（荊門浮舟望蜀江）」（『全唐詩』巻 181）に「逶迤〔曲がりくねったようす〕として巴山尽き、搖曳として楚雲行く」とある。
- 秦嶺：陝西省の山の名。一名に秦山、終南山とも。後漢・班固「西都賦」（『文選』巻 1）に「是に於いて秦嶺を睇み、北阜を眺る」とあり、その李善注に「秦嶺、南山なり。『漢書』に曰く、秦の地に南山有りと」という。
- 樓上：樓の上層。「古詩十九首」其二（『文選』巻 29）に「盈盈たり 樓上の女、皎皎として窓牖に当たる」という。
- 滿樓：ものや光、気配などが樓を満たすこと。唐・許渾「咸陽城の東樓（咸陽城東樓）」（『全唐詩』巻 533）に「溪雲 初めて起こり 日 閣に沈む、山雨

来たらんと欲し 風 楼に満つ」と、五代・韋莊「憶昔」（『全唐詩』卷 696）に「昔年 曾て五陵に向いて遊び、子夜歌 清く 月 楼に満つ」などとみえる。ここでは、雲が楼の周りを取り囲むように垂れこめている様子を指す。

### 【補説】

洋州で詠まれた「守居園池雜題三十首」の第十二首。「守居園池雜題三十首」については別裁-20「蓼嶼」補説を参照。洋州はちょうど終南山の南、大巴山の西に位置しており、詩の内容とも合致する。

冒頭、詩人は巴山と秦嶺という二つの山脈を引いて望雲楼の位置を説明する。広大無辺の存在を以てある庭園に建つ一つの楼閣を説く、両者の大小は歴然だが、敢えて用いたところに、「高く聳えるこの楼は広大な山々に比肩し得るほど素晴らしい」という思いが込められているだろう。本詩は詩題のみならず、各句に「楼」字が登場する。単純に見れば一種の言葉遊びなのだが、やはり楼に対する詩人の深い愛着の心が見出せる。結句にて、楼の周囲を雲がすっぽり包みこみ、雲と楼があたかも一体化してしまったという感覚を、僅か五字で的確に描き出している。このように、異なるもの同士が一体化するありさまを「一色」と描いた先例には、唐・張若虚「春江花月の夜（春江花月夜）」（『全唐詩』卷 117）の「江天 一色 纖塵無し」、唐・岑参「群公に陪して龍岡寺にて舟に泛ぶ（陪群公龍岡寺泛舟）」（『全唐詩』198）の「漢水 天 一色」などがある。

（加納留美子）

## 別裁-22 文同「露香亭」

ろこうてい  
「露香亭」

宿露濛曉花

婀娜清香發

隨風入懷袖

累日不消歇

しゆくろ ぎょうか もう  
宿露 曉花を濛し、  
あ だ せいこうはつ  
婀娜として 清香発す  
かぜ したが かいしゅう い  
風に 随いて 懷袖に入り  
るいじつ しょうけつ  
累日 消歇せず

### 【収載】

『丹淵集』 卷 15、『全宋詩』 卷 445

【押韻】

「発」「歇」：入声 10「月」

【訳】

夜露が暁の花を包み、  
匂い立つ美しさで、清らかな香りが立つ。  
風にのって懷や袖の中に入り、  
いつまでも消えることがない。

【注】

- 露香亭：文同が洋州知事となり整理した郡圃の中にあった建物（『大宋一統志』 卷 186）。
- 宿露：夜露のこと。唐・白居易「早に林下に行く（早行林下）」（『全唐詩』 卷 443）に「宿露残花の気、朝光新葉の陰」とある。
- 濛：満ち溢れていること。ここでは、夜露が花を覆い隠すようにたっぷりと降りていることをいう。
- 暁花：明け方の花。露や雨を含むみずみずしい花を指していることが多い。北宋・張耒「春林」（『柯山集』 卷 6）「春林 露は雨の如く、蕭蕭として暁花寒し。手を引<sup>の</sup>べて高紅を攀<sup>ひ</sup>けば、微香 鼻端に來たり」。
- 婀娜：艶やかで美しい様子を形容する。晝韻の語。魏・曹植「洛神賦」（『文選』 卷 19）に「華容婀娜として、我をして飡を忘れしむ」とある。
- 累日：何日も。いつまでも。
- 消歇：消えてなくなること。

【補説】

洋州で詠まれた「守居園池雜題三十首」の第二十首。「守居園池雜題三十首」については 20「蓼嶼」補説を参照。

第三句目「風に随いて懷袖に入り」からは、前漢・班婕妤の「怨歌行」（『文選』 卷 27）「君の懷袖に出入し、動揺して微風を発す」の句が連想される。この句が想起されることも手伝い、本詩からは女性のイメージが思い起こされる。香りはもともと形や質感のないものであるが、懷や袖に入り込んでくる香

りがまるで女性として擬人化されているようで、色っぽく、またかわいらしく感じられる。

蘇軾がこの詩に次韻して詠んだ「文与可の洋州園亭三十詠に和す（和文與可洋州園池）」其二十「露香亭」（『合注』巻14）は以下の通り。

亭下佳人錦繡衣	亭下の佳人 錦繡の衣、
滿身瓔珞綴明璣	滿身瓔珞にして明璣を綴る。
晚香消歇無尋處	晚香 消歇して尋ぬる処無く、
花已飄零露已晞	花已に飄零し 露已に晞く <sup>かわ</sup>

文同の詩では女性のイメージが暗示されるのみであったが、蘇軾の詩ではより踏み込んで、露を帯びた花の姿をより直接的に艶麗な女性の姿に例えている。

(大戸温子)

## 別裁-23 文同「溪光亭」

けいこうてい 「溪光亭」	
横湖決餘波	おうこ よ は けつ 横湖 余波決し
瀾瀾瀉寒溜	かくかく かんりゅうそそ 瀾瀾として寒溜瀉ぐ
日影上高林	にちえい こうりん のぼ 日影は高林に上り
清光動牕牖	せいこう そうよう うご 清光は窓牖に動く

### 【収載】

『丹淵集』巻15、『全宋詩』巻445

### 【押韻】

「溜」：去声 49「宥」、「牖」：上声 44「有」（通押）

### 【訳】

横湖の岸辺を越えて溢れ出る波が、  
さらさらと冷ややかに流れ来る。  
太陽は高く聳える木立の上に掛かり、  
清らかな光が窓辺に揺らめいている。

【注】

- 溪光：せせらぎの水面の光。唐・呉融「湖州溪楼 書して鄭員外に献ず（湖州溪楼書獻鄭員外）」（『全唐詩』卷 684）に「青林に雨色上り、白鳥は溪光を破る」とある。
- 横湖：横たわる湖。「守居園池雜題三十首」其二「横湖」に「長湖東西に直たり」とあることから、ここでは、その園池内にある東西に長い湖を指すと考えた。
- 決：決壊する。漏れ溢れる。北宋・蘇軾がこの詩に和して「決して湖波を去るも尚お情有り、却りて初日に随いて簷檻に動く」（『合注』卷 14）と詠っており、ここでは横湖の波が岸边に打ち寄せ、溢れて流れ出たことを言うか。
- 余波：波の末。ここでは、横湖から溢れ出た水のこと。晋・木華「海賦」（『文選』卷 12）に「猶尚呀呶な お が こうとして、余波は独り湧く」とある。
- 瀾瀾：水の流れる音。唐・韓愈「藍田縣丞廳壁記」（『五百家注昌黎集』卷 13）に「水は瀾瀾としてきざはし めぐ除を循りて鳴る」とある。
- 寒溜：清涼な水の流れ。唐・欧陽詹「智達上人 水精念珠歌」（『全唐詩』卷 349）に水晶の比喻として「連連たる寒溜は陰軒に下り、熒熒たる泣露は秋草に垂る」とある。ここでは第一句の「余波」がせせらぎとなったものを言う。
- 日影：太陽。晋・向秀「思舊賦」（『文選』卷 16）に「嵇生の永に辞するを悼み、日影を顧みて琴を弾ず」とある。
- 窓牖：まど。「古詩十九首」其二（『文選』卷 29）に「盈盈たり楼上の女、皎皎として窓牖に当たる」とある。

【補説】

洋州で詠まれた「守居園池雜題三十首」の第二十二首。「守居園池雜題三十首」については別裁-20「蓼嶼」補説を参照。

溪光亭は、横湖の傍らにあるようである。木立に降り注ぐ陽光が、木漏れ日となって、横湖から流れ出すせせらぎに降り注ぐ。その光が水面のさざ波に反射して、きらきりと窓辺に照り映える。それが亭の名「溪光」の由来となっている。この詩の眼目は、その「溪光」を繊細に余すところなく描き取った点にあると言えるだろう。なお、蘇軾の和詩（『合注』卷 14）に「溪光は古より人

の画く無きも、新詩に憑仗して与に写し成す」と見え、蘇軾も文同詩の溪光描写を高く評価しているようである。

(高芝麻子)

## 別裁-24 蘇轍「遺老齋」

いろうさい  
「遺老齋」

久無叩門声

啄啄問何故

田中有人至

昨夜盈尺雨

ひさ　もん　たた　こえ　な  
久しく門を叩く声無く  
たくたく　なにゆえ　と  
啄啄として何故かと問う  
でんちゅう　ひと　いた　あ  
田中より人の至る有り  
さくやえいしゃく　あめ  
昨夜盈尺の雨ありと

### 【詩人小伝】

蘇轍 (1039-1112)、字は子由、または同叔。晩年、潁濱遺老と号す。蘇洵の子、蘇軾の弟であり、眉山（現在の四川省眉山市）の人。嘉祐二年 (1057) 進士に及第し、地方官を経て、中書舎人、戸部侍郎、御史中丞、門下侍郎などの要職も歴任した。旧法の失勢で貶謫され、晩年潁昌（現在の河南省許昌市）に隠居した。蘇轍と蘇軾の兄弟の仲のよさは有名で、唱和の作も数多く残る。『宋史』巻 339。

### 【収載】

『欒城第三集』巻 2、『全宋詩』巻 870

### 【校異】

「啄啄」、『欒城集』、『全宋詩』は「剥啄」に作る。

### 【押韻】

「故」：去声 11 「暮」、「雨」：去声 10 「遇」（同用）

### 【訳】

長い間、来訪の客はなく、戸をたたく音も聞いたことがなかった。

いきなりとんとんと音が響いて、どうしたのかと尋ねてみる。

来たのは田圃の人、

昨日の夜中に大雨が降った、と。

【注】

- 遺老齋：崇寧三年（1104）、蘇轍は長い貶謫生活から戻り、亡くなるまでの十年ほどの間ずっと潁水の辺りに隠居し、自ら潁濱遺老と号した。当時の居室を「遺老齋」と名付け、「遺老齋記」（『欒城第三集』巻 10）という文章も残る。その文章によると、晩年の蘇轍は「一室の間に退居し、門を杜じて却掃し、物と接せず」という生活を送っていたことがわかる。
- 啄啄：擬音語。戸をたたく音。唐・韓愈「剥啄行」（『全唐詩』巻 339）に「剥剥啄啄、客の門に至る有り」とある。剥啄も同じく、ドアをたたく音。北宋・蘇軾「賢師の琴を聴く（聴賢師琴）」（『合注』巻 12）に「門前剥啄として誰か門を叩く、山僧未だ閑ならず君嗔る勿れ」とある。
- 盈尺雨：一尺の深さに満ちるくらいの雨。大雨。

【補説】

本詩は蘇轍の晩年隠居時代の作「遺老齋絶句十二首」の第六首である。連作の第一首に「門を杜ざすは本より人を畏れ、門開くも自ずから客無し」という句があり、第十首にも「事を避け 已に客を謝す」という句があり、遺老齋に隠居していた時期には来客を拒んでいた様子を見て取ることができる。

本詩の起句においても、長い間門をたたく音も聞かない、つまり誰も訪ねて来ない静けさを詠う。しかし二句目に「啄啄」という擬音語を使い、一句目の静けさを破る。リズムカルな音を静かな世界に入れて、かえって隠者の平穏で、変化がない生活を浮びあがらせる。訪ねて来たのは「田中の人」、つまり農夫である。話題となったのは昨夜の雨、恐らく詩人と農作業についての雑談を交わしたのだろう。詩人と交渉がある限られた人物、そしてその人との話題を具体的に描き、詩人の日常をたくみにとらえている。

（許喬）



## 別裁-25 郭祥正「西村」

せいそん  
「西村」

遠近皆僧刹

西村八九家

得魚無賣處

沽酒入蘆花

えんきん みなそうせつ  
遠近 皆僧刹

せいそん はちきゅう いえ  
西村 八九の家

うお う う ところ な  
魚を得るも売る 処 無く

さけ か ろ か い  
酒を沽いて蘆花に入る

### 【詩人小伝】

郭祥正 (1035-1113)、字は功父、また功甫とも。醉吟居士、謝公山人、漳南浪士などと号す。太平州当塗県（現在の安徽省馬鞍山市当塗県）の人。皇祐五年 (1053) の進士と推定され、官職を経た後、当塗県姑熟の青山に隠棲する。その詩風は若い頃、同時代の梅堯臣に李白の後継者と称された。『宋史』巻 444。

### 【収載】

『青山集』巻 25、『全宋詩』巻 778

### 【押韻】

「家」「花」：下平声 9「麻」

### 【訳】

遠方も近場もどこも寺、  
西側の村には八、九軒の家。  
魚を捕っても売る場所なく、  
酒を買って、蘆の花咲くところに引きこもる。

### 【注】

- 僧刹：仏寺。唐・張籍「故僧影堂に題す（題故僧影堂）」（『全唐詩』巻 386、また『全唐詩』巻 538 は一部文字の違いがあるものを許渾作の「僧院影堂」として収録する）に「香消え雲鎖ず 旧僧の家、僧刹の残形 半壁斜めなり」とある。
- 得魚：魚を捕まえる。『莊子』外物「筌は魚を得る所以なるも、魚を得て筌を忘る」。

- 沽酒：店で売っている酒、あるいは酒を買う。『論語』郷党篇「沽酒、市脯は食らわず」、唐・李白「酒を待つも至らず（待酒不至）」（『全唐詩』巻 182）に「玉壺 青糸に繋ぎ、酒を沽<sup>か</sup>いて来たること何ぞ遅き」とある。
- 蘆花：蘆の花。ここでは水辺の植物として、漁師の居場所を指す。五代・韋莊「将に蘭芷村の居をトせんとして郡中の在仕に留別す（將ト蘭芷村居留別郡中在仕）」（『全唐詩』巻 697）には、「今従り隠れ去らんとするも<sup>もと</sup>応に<sup>もと</sup>覓め難かるべし、深く蘆花に入りて釣翁と作らん」とある。郭祥正「右曹霸 馬を画き 王荊公 手づから杜甫の丹青引を写し其の尾に跋す（右曹霸畫馬王荊公手寫杜甫丹青引跋其尾）」（『青山集』巻 29）には、「魚の躍るも魚の沈むも都て知らず、竿を垂らして只だ<sup>もと</sup>要むるは魚を得て帰ること。天寒く浪急にして魚得難し、愁いて蘆花に入れば日は又た西す」とある。

### 【補説】

本詩は、「楊公済の錢塘西湖百題に和す（和楊公済錢塘西湖百題）」其二十六にあたる。杭州西湖周辺の景物を詠んだ連作。詩題の楊公済とは楊蟠のこと。公済は字。欧陽脩、蘇軾などとも交流のあった詩人。郭祥正には、「次韻して光守楊公済の寄せらるるに答う（次韻答光守楊公済見寄）」詩（『青山集』巻 23）もある。楊蟠は別集がなく、『全宋詩』巻 408 に地理書等から集めた詩が収められる。詩題をみるかぎり、唱和のもととなった楊蟠の「錢塘西湖百題」の詩と思われるものは、約三十首が残る。郭祥正の唱和詩は、あまり韻字を同じくしていない。『宋詩別裁』は引き続き、郭祥正の連作から別裁-26「客兒亭」、別裁-27「翠樾堂」を収める。この二首は楊蟠の作も残るが、「西村」は残らない。

楊蟠は元祐年間（1086-1094）に杭州にいた。その頃に唱和した可能性が高い。

この郭祥正の連作の中には、他に木こりを取りあげた其九十一「樵歌嶺」（楊蟠の作では「歌樵嶺」の題に作る）もある。漁師も木こりもどちらも隠者の象徴である。また郭祥正の詩風が、李白に喩えられるのは、酒を詠うことが多いことも関係している。酒を飲む漁師の姿を自分と重ねているのかもしれない。

郭祥正の七絶「漁者」（『青山集』巻 27）は、  
 從來生計託魚蝦      從來 生計魚蝦に託し

賣得青錢付酒家	売りて青錢を得て酒家に付す
一醉不知波浪險	一酔すれば波浪の險なるを知らず
卻垂長釣入蘆花	却って長釣を垂れ蘆花に入る

とあり、この詩と表現の重複が多くみられる。こちらの漁師が西湖の漁師か否かは不明である。漁師のことのみに焦点をあてた「漁者」に対し、「西村」は風景として漁師を詠み込む。これは、西湖の情景を描く連作の中の一作なためであるが、そのことが詩の表現に情景をもたらし、作品としてより成功している。

南宋・蔡正孫『詩林広記』後集卷8は、郭祥正の「<sup>おとな</sup>隱者を訪う（訪隱者）」、「山寺の老僧（山寺老僧）」、「西村」の三首の絶句（「隱者を訪う」は七絶、「山寺の老僧」は五絶）を引用して「黄玉林（黄昇、玉林は号）云う、功甫（郭祥正の字）の詩の此くの如き数絶、真に太白（李白の字）体を得たり。宜しく諸老の称賞する所と為るべきなり」という。

この「西村」詩は、河上肇が翻訳をほどこしている（『陸放翁鑑賞』『河上肇全集』20所収、岩波書店1982）。以下に訳をあげる。

をちこちはみな<sup>らん</sup>蘭若  
 住む村人も八九軒  
 釣りたる魚の売場なく  
 酒のみ買うてまた蘆花に入る

（佐野誠子）

## 別裁-26 郭祥正「客兒亭」

かくじてい 「客兒亭」	
翻經人已去	ほんきょう ひと すで さ 翻 經 の 人 已 に 去 る に
誰爲立幽亭	た ため ゆうてい た 誰 が 為 に 幽 亭 立 つ
一望野雲白	ひと のぞ やうんしろ 一 た び 望 め ば 野 雲 白 く
半藏山骨青	なか かく さんこつ あお 半 ば 蔵 す 山 骨 の 青 き を

【収載】

『青山集』 卷 26、『全宋詩』 卷 778

【押韻】

「亭」「青」：下平声 15「青」

【訳】

経典を翻訳した人はもういないのに、  
誰のためにこの静かなあずまやはあるのだろう。  
見わたすと雲が白くたなびき、  
山石の青さが半ば覆われている。

【注】

- 客児亭：余杭（現在の浙江省杭州）霊隠山にあったあずまやの名。夢児亭、夢謝亭ともいう。劉宋・謝霊運の幼名である客児にちなむ。唐・白居易「餘杭形勝」（『全唐詩』 卷 443）に、「夢児亭古くして名は謝と伝え、教妓楼新たにして姓は蘇と道う」の句がある。
- 翻経：仏教経典を翻訳する。
- 野雲：郊外の空に広がる雲。北宋・王安石「舎弟の賞心亭即事に次韻す（次韻舎弟賞心亭即事）二首」其二（『王荊公詩注』 卷 38）に「稍く野雲 晚霽を成さんと覚え、却<sup>ふりむ</sup>けば山月 是れ 朝暾かと疑う」の句がある。
- 山骨：山中の岩石。北宋・梅堯臣「茶磨二首」其一（『宛陵集』 卷 43）に「楚匠<sup>けず</sup> 山骨を斲り、檀を折りて輦臍を為す」の句がある。

【補説】

本詩は「楊公済の錢塘西湖百題に和す（和楊公済錢塘西湖百題）」の其六十八にあたる。「楊公済の錢塘西湖百題に和す」については、別裁-25「西村」を参照。

西湖は劉宋の謝霊運が少年時代を過ごし、愛した場所である。この詩のタイトル「客児」及び第一句の「翻経の人」とは謝霊運をさす。梁・鍾嶸『詩品』の謝霊運の条によれば、道教の天師道の指導者であった杜明が東南から客が訪れる夢を見た夜、ちょうど謝霊運が生まれた。しばらくして謝霊運の祖父謝玄が亡くなると、謝家の人々は霊運を杜明のもとに預けて育ててもらうことにした。よって彼のことを客児と呼んだという。また語注に触れたように、夢謝亭

はこれにちなんで客兒亭とも呼ばれた。

「翻經」の故事は、謝靈運が廬山の僧慧遠<sup>えおん</sup>に心服し、慧遠・慧観らとともに「大般涅槃經」の翻訳を完成させたことをいう。翻經台については、北宋・陳舜俞の『廬山記』巻2に「(謝靈運)遠公を一見し、肅然として心服す。乃ち寺に即きて涅槃經を翻す。因りて池を鑿<sup>うが</sup>ち台を為<sup>つく</sup>り、白蓮を池中に植う。其の台を名づけて翻經台と曰う。今の白蓮亭は即ち其の故地なり」との記述がある。唐・顔真卿は撫州刺史の任にあった大暦四年(769)、「撫州寶應寺翻經臺記」(『全唐文』巻338)を作り、この事績を称えた。謝靈運が実際に經典を翻訳した場所は撫州であったが、西湖のほとりにも「翻經台」という場所があったらしい。「楊公済の錢塘西湖百題に和す」には「客兒亭」とともに、其七十に「翻經臺」という詩が収録されており、「翻成す 多少の帙、台石 尚お輝光す」という。謝靈運翻經の故事にちなんだ詩では、唐・温庭筠「知玄上人を訪ねて經を暴<sup>さら</sup>すに遭い、因りて贈ること有り(訪知玄上人遇暴經因有贈)」(『全唐詩』巻583)の「客兒 自ずから有り 經を翻する処、江上 秋来たりて 蕙草荒る」、同じく唐・張祐「浮図<sup>こぼ</sup>を毀つ<sup>こぼ</sup>の年 東林寺の旧に逢う(毀浮圖年逢東林寺舊)」(『全唐詩』巻510)の「經を翻す 謝靈運、壁に画す 陸探微」などがある。

詩の前半は謝靈運翻經の故事を詠い、後半はあずまやから眺める風景を描く。その後半二句は整った対句になっており、特に「白」と「青」の色彩のコントラストは鮮やかだ。また「野雲白く」の「白雲」は、脱俗の趣を漂わせる。謝靈運もまた「始寧の墅を過<sup>よぎ</sup>る(過始寧墅)」(『文選』巻26)で「白雲 幽石を抱き、緑篠 清漣に媚ぶ」と、俗塵を離れた清らかな世界を描いている。

唱和のもととなった楊蟠の「客兒亭」(『全宋詩』巻408)は以下の通り。

昔日林間興	昔日 林間の興
風流謝客兒	風流 謝客兒
春山花又發	春山 花 又た発くも
不見屐來時	見ず 屐の來たる時を

「屐」は謝靈運が山中往来の際に着用したという謝公屐。客兒亭に立つ人物は、世俗を離れた場所で静かに謝靈運の故事に思いを巡らせ、目の前に広がる清らかな景物の美しさを楽しんでいるのである。

(森山結衣子)

## 別裁-27 郭祥正「翠樾堂」

すいえつどう  
「翠樾堂」

深堂待游客

老木競留春

花發多臨水

雲開始見人

しんどう ゆうかく ま  
深堂 游客を待ち  
ろうぼく はる とど きそ  
老木 春を留むるを競う  
はな ひら おお みず のぞ  
花 発きて多く水に臨み  
くも ひら はじ ひと み  
雲 開きて始めて人を見る

### 【収載】

『青山集』巻 26、『全宋詩』巻 778

### 【押韻】

「春」：上平声 18「諄」、「人」：上平声 17「真」（同用）

### 【訳】

ひっそりとたたずむ堂宇は旅人を待ち、  
老樹は春を留めようと張り合っている。  
花は咲いてあまた水面<sup>みなも</sup>に映り、  
靄は晴れてようやく人の姿を見いだす。

### 【注】

- 翠樾堂：法雲昼上人（生卒年未詳）が精舎の一部としてしつらえた堂屋。「翠樾」は木陰の意。北宋・契嵩（1007-1072）「法雲十詠詩叙」（『鐔津集』巻 12）に「法雲昼上人、其の居の西厦を繕いて翠樾堂と曰う。其の山林の美蔭を得たるを以てするなり」とある。法雲昼上人に頼まれ叙を綴ったと末尾にみえ、法雲昼上人は作者である契嵩とほぼ同時代の人であろう。
- 深堂：ここでは、「翠樾堂」を指す。「深」は人気の少ない、俗世から隔たっていることを意識させる。梁・沈約「青苔を詠む詩（詠青苔詩）」（『初学記』巻 27）に「長風 細草に隠れ、深堂 綺錢〔苔〕<sup>かく</sup>に没る」とある。
- 留春：春を惜しみ、留めようとする事。「春」は、ここでは、季節としての春とともに、老いた樹木の生命力をイメージさせる。唐・白居易「晩春 酒を

携えて沈四著作を尋ねんと欲す 先に六韻を以て之に寄す（晩春欲攜酒尋沈四著作先以六韻寄之）」（『全唐詩』卷 456）に「計として春を留め得る無く、<sup>いづく</sup>争んぞ能く老いを奈何せん」とある。

- 臨水：水の流れを望み眺めること。ここでは水に姿を映すこと。劉宋・鮑照「行路難に擬す（擬行路難）十八首」其十三（『鮑明遠集』卷 8）に「今暮 水に臨みて抜きて已に尽くるも、明日 鏡に対すれば復た已に盈つ」、唐・劉禹錫「牛相公の南莊に遊び……に和す（和牛相公遊南莊……）」（『全唐詩』卷 360）に「薔薇 乱れ発きて多く水に臨み、<sup>けいせき</sup>鵜<sup>なら</sup> 双び遊びて船を避けず」とある。
- 雲開：空を覆っていた雲や靄がはれて消えること。唐・李白「地を司空原に避け<sup>おも</sup>懐いを言う（避地司空原言懷）」（『全唐詩』卷 183）に「雪は<sup>は</sup>霽る万里の月、雲は開く九江の春」とある。

#### 【補説】

本詩は「楊公済の錢塘西湖百題に和す（和楊公済錢塘西湖百題）」の其八十六にあたる。「楊公済の錢塘西湖百題に和す」については、別裁-25「西村」を参照。

翠樾堂注にあげた「法雲十詠詩叙」によると、翠樾堂は精舎の一部として建てられたものである。法雲昼上人の精舎は、北のまがきには門（陟崖門）があり、林へと小道（嘯月径）が伸びている。泉（夏涼泉）が引かれ、昔の僧を偲ぶ塔（華嚴塔）が建てられている。険しい峰（樵歌嶺）に亭（映発亭）が立っており、山間（楊梅塢）を臨むように楼阁（清隱閣）が聳える。また、竹林のそばに脩竹軒がしつらえてある。十ある景物がそれぞれ風情ある名前と呼ばれている。同文の末に、「亦幸いにして上人 既に諸君の詩を得ることを楽しみ、特に予に属して以て序を為らしむ」云々と見え、当時多くの詩人が精舎を詩の題材にしたようだ。郭祥正の連作ではこれらすべての景物を詠う。

精舎全体は、西湖の西南に位置する大慈山の中であって、北は浙江を望み、南は錢塘湖に通じているという。このように、翠樾堂は、地理的に人里から隔たっている。俗世から物質的な距離を取っているばかりでなく、僧の住まいゆえ超俗性をまとう堂宇である。これが二重の意味において、冒頭で「深」と詠

んだゆえんである。

詩全体は、A B B A（人・花・花・人）の構造をとる。花を多く咲かせることが、老木の生命力の象徴であり、それが「春」を「留」めると捉えられる（第二・三句）。霧に包まれて、堂宇は外界から隔てられており、それが上述の「深」字と呼応して巧みに堂宇の超俗性を引き立て（第一・四句）。

楊蟠の「翠樾堂」詩は以下の通り（『全宋詩』巻 408）。

野鳥久不去	やちょう ひさ さ 野鳥 久しく去らず、
清風長近人	せいふう とこしえ ひと ちか 清風 長 に人に近し。
山間豈有曆	さんかん あ こよみ あ 山間 豈に曆 有らん、
祇見四時春	た しいじ はる み 祇だ四時の春を見る。

楊詩、郭詩いずれも「人」と「春」を韻字に用いている。

（鄭月超）

## 別裁-28 秦觀「夢中得此」

「夢中に此れを得」

縞帶橫秋匣	こうたい しゅうこう よこ 縞帶 秋 匣に横たわる
寒流炯暮堂	かんりゅう ぼどう あき 寒流 暮堂に炯らかなり
風塵如未息	ふうじん いま や ごと 風塵 未だ息まざるが如し
持此奉君王	これ も くんおう ほう 此を持ちて君王に奉ぜん

### 【詩人小伝】

秦觀 (1049-1100)、字は太虚、後に少游に改める。淮海居士などと号した。高郵（現在の江蘇省高郵市）の人。元豊八年 (1085) 進士に及第し、元祐年間 (1086-1094) には京師で太学博士、更に秘書省正字兼国史院編集官を務めたが、後に立て続けに貶謫の命が下り、遂には雷州（現在の広東省雷州市）まで流された。元符三年 (1100)、北歸の途上藤州（現在の広西省藤州市）にて没。蘇軾の薫陶を受け、蘇門四学士の一人に数えられる。『宋史』巻 444。

### 【収載】



『淮海集』巻 10、『全宋詩』巻 1062

【押韻】

「堂」：下平声 11「唐」、「王」：下平声 10「陽」（同用）

【訳】

白絹でできた帯（がごとき刀剣）が白い箱に収まっている。

冴え冴えとしたその光、夕暮れ時の室内に輝きわたる。

世の戦乱は未だ収まりそうにない。

ひとつこれを携え君王に献上いたすでしょう。

【注】

- 夢中得此：夢でこれを得た。「得此」は「得句」に同じ。夢の中で詩句を得たという意。北宋・蘇軾に「瓊儋の間を行く 肩輿にて坐睡す 夢中に句を得るに云う『千山 鱗甲動き、万谷 笙鏡酣なり』……（行瓊儋間肩輿坐睡夢中得句云千山動鱗甲萬谷酣笙鏡……）」（『合注』巻 41）という詩題がみえる。更に、この四字は第四句「持此」に対応し、夢の中で得た刀剣（以下の注を参照）も併せ指すだろう。
- 縞帯：白絹でできた帯。だが三四句の表現を勘案すれば、ここでは冴え冴えとした光を放つ带状のもの、つまり刀剣の比喩と考えられる。
- 秋匣：白色の箱。北宋・韋驥(1033-1105)「感懷」（『錢塘集』巻 5）に「劍氣秋匣に蔵され、弓声 古弰ことう〔古い弓袋〕に閉ざさる」という。「秋」は、ここでは季節でなく、西方に配される色＝白を表す。「匣」は、ものを容れるはこ。
- 寒流：冷たく輝く光。寒光に同じ。唐・皎然「盧孟明と別れし後 南湖に宿りて月と対す（與盧孟明別後宿南湖對月）」（『全唐詩』巻 817）は「五湖に夜月生じ、千里 寒流満つ」と、月光を指して寒流という。ここでは刀剣の光を指す。唐・元稹「説劍」（『全唐詩』巻 397）に「曾て桂樹の枝に被され〔掛けられ〕、寒光 林藪を射る」とある。
- 炯暮堂：夕暮れ時の堂宇に輝きわたる。
- 風塵・奉此二句：二句は、杜甫「蕃劍」（『全唐詩』巻 225）「風塵 未だ息まざるに苦しむ、汝を持ちて明王に奉ぜん」を踏まえた表現と考えられる。「風塵」は、戦乱の世のこと。「奉」は、献上するの意。

## 【補説】

第四句に言われる「此」が一体何を指すのか、詩では明らかにされず、読み手は各句を手掛かりに推測するほかない。白い箱に収められてなお、薄暗い室内に光を放つ「縞帯」。更に後半二句は、名剣を詠じた杜甫の詩句をほとんどそのまま踏まえて、戦乱続きの不穏な情勢を暗示している。こうした流れを踏まえれば、「縞帯」は文字通りの絹織りの帯などではなく、賊を平定する道具、つまり刀剣の比喩表現であると想像されるのである。

縞<sup>しろ</sup>の刀身<sup>しろ</sup>に秋の匣、さらに薄暗い室内に射す一線の光と、似た表現を巧みに重ね合わせることで、寒気を覚えさせる程の清冽な光を放つ刀剣のイメージがより強く表現されている。のみならず、君王に献上するに値する程の名剣に、秦観は己の才覚や登用を願う気持ちを投影していた可能性も考えられる。

(加納留美子)

## 別裁-29 傅察「詠雪」

ゆき えい  
「雪を詠ず」

都城十日雪

庭戸皓已盈

呼兒試輕掃

留伴小牕明

とじょう とおか ゆき  
都城 十日の雪  
ていこ こう すで み  
庭戸 皓として已に盈つ  
じ よ こころ けいそう  
兒を呼びて 試みに輕掃せしめ  
とど ともな しょうそう めい  
留めて 伴わん 小窓の明

## 【詩人小伝】

傅察 (1090-1126)、字は公晦。孟州济源（現在の河南省济源市）の人。崇寧五年 (1106) の進士で、淄川県丞、太常博士、兵部員外郎、吏部員外郎などを歴任したが、金からの使者を出迎える途上、金兵に殺された。『宋史』巻 446。

## 【収載】

『忠肅集』巻上、『全宋詩』巻 1727

## 【校異】

「十」、『全宋詩』は「一」に作る。

「皓」、『忠肅集』は「浩」に作る。

【押韻】

「盈」：下平声 14「清」、「明」：下平声 12「庚」（同用）

【訳】

みやこは十日も雪が降り続き、  
庭はすでに一面まっしろになっている。  
息子を呼んでさっと掃かせてみよう。  
ただ小さな窓の雪明かりだけは残しておこうか。

【注】

- 庭戸：にわ。唐・陳子昂「暉上人の夏日林泉に酬ゆ（酬暉上人夏日林泉）」（『全唐詩』巻 83）に「林臥 軒窓に対し、山陰 庭戸に満つ」とある。
- 皓：白い。明るい。
- 留伴：引き留めて共に居る。北宋・梅堯臣「紅梅」（『宛陵集』巻 36）に「吹くを休めよ江上の笛、留め伴わん庾園の人」とある。
- 小窓明：小さな窓のあかり。唐・李商隱「晚晴」（『全唐詩』巻 540）に「併せて添う 高閣の廻、微かに注ぐ 小窓の明」とある。

【補説】

この詩は『忠肅集』では「雪九首」という九首連作の一首目にあたる。

当時の人々にとって、雪とは豊作をもたらす瑞祥であり、傳察自身、この連作の第九首で「盈尺 嘉祥を兆し、三登 時泰を賀す」と詠っている。だからであらうか、詩人は、雪を掃き、片付けさせながらも、窓辺に積もった雪をあえて残したと詠う。冒頭で「十日雪」と言いながら、雪を片付けるに際してわざわざ「軽」字を用い、また窓辺の雪も残ったのではなく「留」めた<sup>とど</sup>と描いていることから、雪の好ましさに目を向け、満喫しようとする詩人の姿勢が感じられる。雪景色の中に見いだされたささやかな冬の楽しみが、この詩を軽妙なものとしている。

（高芝麻子）

# 別裁-30 劉一止「几上人名所乗舟曰釣月庵求詩爲賦」

「<sup>きしょうにん</sup>几上人<sup>の</sup> 乗る<sup>ところ</sup> 所<sup>ふね</sup>の舟<sup>な</sup>に名づけて<sup>ちょうげつあん</sup>釣月庵<sup>い</sup>と曰う<sup>し</sup> 詩<sup>もと</sup>を求めらる<sup>ため</sup> 爲<sup>ふ</sup>に賦す」

昔人<sup>むかしひと</sup>釣<sup>つ</sup>忘<sup>えさ</sup>餌<sup>わす</sup>  
昔人<sup>いま</sup>釣<sup>し</sup>る<sup>またはり</sup>に餌<sup>わす</sup>を忘る

今師<sup>い</sup>亦<sup>ま</sup>忘<sup>は</sup>鉤<sup>や</sup>  
今師<sup>こ</sup>も亦<sup>う</sup>鉤<sup>きしゅう</sup>を忘る

静夜<sup>せいや</sup>江<sup>こう</sup>不<sup>は</sup>湍<sup>や</sup>  
静夜<sup>こ</sup>江<sup>う</sup>湍<sup>きしゅう</sup>からず

孤光<sup>ここう</sup>送<sup>お</sup>歸舟<sup>く</sup>  
孤光<sup>こ</sup>送<sup>う</sup>歸舟<sup>きしゅう</sup>を送る

## 【詩人小伝】

劉一止 (1080-1161)、字は行簡。湖州歸安（現在の浙江省湖州）の人。宣和三年 (1121) の進士。北宋末から南宋初にかけて文名を称された。金に対する積極的な抗戦論を主張したため、秦檜に疎んじられた。『宋史』巻 378。

## 【収載】

『苕溪集』巻 4、『全宋詩』巻 1447

## 【校異】

劉一止の別集『苕溪集』に収める本作を底本が南宋・傅察の作と誤るのをいま正す。

「亦」、底本は「釣」に作るが、『苕溪集』によって改める。

## 【押韻】

「鉤」：下平声 19「侯」、「舟」：下平声 18「尤」（同用）

## 【訳】

むかし、かの人には釣りに餌をつけなかったという。

いま、上人もまた針すら用いない。

静かな夜、川の水も穏やかに流れ、

水面に映るひとすじの月の光が帰り行く舟を見送る。

## 【注】

○ 几上人：未詳。上人は僧侶の尊称として多く用いる。

○ 釣月：月明かりのもと釣り糸を垂れる。隠者の生活。

○ 昔人一句：いわゆる太公望呂尚を指すものであろう。渭水のほとりで釣りを

していたところ、周の文王に見出されて召し抱えられ、殷を討ち滅ぼすに力を発揮した（『史記』齊太公世家）。その釣り針は真っ直ぐで餌はついていなかったというのは、たとえば唐・盧仝「直鉤吟」（『全唐詩』卷 388）に「哀しい哉 我が鉤 又た食無く、文王已に没して復た生ぜず。直鉤の道 何時か行われん」とみえるように、古くからの伝承があったと思われる。

- 忘：顧みない、気にとめない。
- 湍：水の流れが激しく急なさま。
- 孤光：水面にぼつんと映る光。ここでは詩題からもうかがわれるように月の光だが、梁・沈約「湖中の雁を詠ず（詠湖中雁）」（『文選』卷 30）に「群は浮きて輕浪を動かし、<sup>ひとり</sup>單<sup>う</sup>は汎きて孤光を逐う」とあるのは、水面に映る太陽の光。
- 帰舟：家、故郷、あるいは出発地にもどる舟。劉宋・謝靈運「從弟の惠連に酬ゆ（酬從弟惠連）」（『文選』卷 25）に「夢寐に帰舟を<sup>ま</sup>佇ちて、我が吝と勞とを<sup>と</sup>釈かん」。

### 【補説】

前半二句は、詩を送った相手とその舟を「釣月庵」と名付けたことに導かれた措辞。「庵」というからには、それを住まいに見立てているのであろう。釣るという行為はもとより隠者のふるまい。ここではその釣りも魚を釣るためではなく、月を釣る、すなわち月の光を愛でるため。それゆえ、餌もなければ針さえない。呂尚を引き合いに出すところに、いささか諧謔味も感じられる。後半二句、見送るかのように輝く月の光のなか、ゆったりと帰り行く舟のすがたは静謐な画面を構成する。

南宋・恵洪『冷斎夜話』卷 7 に引く唐の僧侶、船子和尚こと徳誠禪師の偈に「千尺の糸綸 直下に垂れ、一波纔かに動けば万波随う。夜静かに水寒く魚食らわず、満船空しく月明を載せて帰る」とみえる。船と月明かり、そして実はそれを目的としない魚釣り、と見事なまでにこの詩と要素を同じくする。この詩がどこで作られたかは詳らかにしないが、湖州出身の詩人による几上人の造形には、松江と朱涇（上海市）のあたりを船にのって往来したという船子和尚のイメージが重ねられているように思われる。

なお本作は『苕溪集』に二首収めるうちの其二で、其一を次に掲げておく。

古徳杖頭挑	古 徳は杖頭に挑ぐ <sup>かか</sup>
今師竿下取	今 師は竿下取る
月満體自如	月満ちて 体 自如たり
清光無處所	清光 <sup>とど</sup> 処まる所無し

(和田英信)

## 別裁-31 崔鷗「春日」

「春日」 <sup>しゅんじつ</sup>	
落日不可盡	落日 <sup>らくじつ</sup> 尽くべからず <sup>つ</sup>
丹林紫谷開	丹林 <sup>たんりん</sup> 紫谷 <sup>しこく</sup> 開く <sup>ひら</sup>
明明遠色裏	明明 <sup>めいめい</sup> たり <sup>えんしよく</sup> 遠色 <sup>うち</sup> の裏
歴歴暝鴉回	歴歴 <sup>れきれき</sup> たり <sup>めい</sup> 暝鴉 <sup>あかえ</sup> 回

### 【詩人小伝】

崔鷗<sup>さいえん</sup>(1057-1126)、字は徳符。雍丘（現在の河南省開封市杞県）の人。元祐九年(1094)の進士。鳳州司戸參軍にはじまり、中央と地方とを往来し、欽宗が即位した時右正言の職を授かった。『宋史』巻 356。

### 【収載】

『宋文鑑』巻 26、『全宋詩』巻 1192

### 【押韻】

「開」：上平声 16「哈」、「回」：上平声 15「灰」（同用）

### 【訳】

夕日よ沈まないでくれ、  
茜色に染まった林や紫色に染まった谷がぱっと広がっている。  
真っ赤に輝く遠い空の中、  
くっきり真っ黒なカラスがねぐらへ帰る。

### 【注】

- 尽：太陽が沈むこと。唐・劉長卿「晩に苦竹館に次り 却りて干越の旧遊を憶う（晩次苦竹館却憶干越舊遊）」（『全唐詩』巻 147）に「遥かに落日の尽くるを看、独り遠山の遅きに向かう」とある。また補説にあげた唐・李白詩も「落日尽」の表現を用いる。
- 丹林：一般には紅葉の林を指す。たとえば、梁・江淹「外兵舅夜集」（『江文通集』巻 3）に「丹林一葉の旧、碧草此れ従り空し」とある。ただしこの詩では、題名からすると季節は春であり、夕日により茜色に染まった林の意味。
- 紫谷：日が沈み暮色に染まった谷。
- 遠色：遠方の空の色。梁・鮑泉「江上望月」詩（『芸文類聚』巻 1）に「蒼蒼として遠色に随い、<sup>ようよう</sup>瀟瀟として<sup>いれん</sup>漪漣を逐う」とある。
- 歴歴：シルエットがはっきりとしているさま。「古詩十九首」其七（『文選』巻 29）「明月 夜光に<sup>しろ</sup>皎く、促織 東壁に鳴く。玉衡 孟冬を指し、衆星何ぞ歴歴たる」とある。
- 暝鴉：カラスの黒さを強調した表現。唐・白居易「禁中暁に臥し困りて王起居を懷う（禁中暁臥困懷王起居）」（『全唐詩』巻 428）に「遲遲として禁漏尽き、悄悄として暝鴉<sup>かまびす</sup> 喧し」とある。

### 【補説】

起句の「不可尽」の語にあらわれているように、春の日の日暮れの景色を惜しんで詠った詩である。「尽」は、語注にあげた夕陽が沈む、というだけでなく、情景を味わい尽くすの意味もかけている可能性がある。たとえば、劉長卿の「双峰寺に宿り 盧七 李十六に寄す（宿雙峰寺寄盧七李十六）」（『全唐詩』巻 149）は、「奇を玩びて尽くべからず、<sup>ようや</sup>漸く遠ざかりて更に幽絶なり」は、景觀の眺めが味わい尽くせないことを、「不可尽」の語を使って表現している。美しい夕陽が沈まないでこの瞬間を永遠に楽しみたいという感情が交ざった「尽」字なのではないだろうか。

この詩で一番印象的なのは、承句の丹林、紫谷ということばの組み合わせであろう。「丹」字には道教的な意味あいが含まれることがあるが、ここは平仄の関係で、「赤」は使えず、とりたてて道教との関係を考える必要はない。丹林に比して、紫谷はあまり用例を見いだせない。日がささなくなり、薄暗くなっ

た色を「紫」であらわすのが新しい。また明・楊慎はその著書『詩話補遺』巻 1「宋人絶句」において、宋詩の中の数少ない優れた作品の一つとしてこの「春日」詩をあげている。そして、楊慎自身の作品「千山紅樹の図を賦し得て楊茂之を送る（賦得千山紅樹圖送楊茂之）」（『升庵集』巻 24）では、「丹林 初曉に清霜重く、紫谷 斜陽に赤焼微かなり」と、「丹林」と「紫谷」を対句に用いている。

承句の「開」字は、解釈が難しい。唐・杜甫「冬に金華山の觀に到り因りて故拾遺陳公の学堂遺跡を得たり（冬到金華山觀因得故拾遺陳公學堂遺跡）」（『全唐詩』巻 220）に「四顧して層嶺より俯すれば、澹然として川谷開く」とある。杜甫詩では、高いところから見下ろしたところ、谷がぽっかりと開けているさまを表現している。崔鶯の詩は、起句の落日にかかわり、林や谷が沈もうとしている夕日を受け入れようと、空間がひろがるさまを「開」としたのだろうか。

転句、結句は暈字で対をつくっている。「暝鴉」は、カラスが夕日に向かって飛び、逆光でさらに黒くなっているために「暝」の字を用いた。唐・李白「涇川<sup>けいせん</sup>にて族弟 綽<sup>じゅん</sup>を送る（涇川送族弟綽）」（『全唐詩』巻 177）にも「極を望めば落日尽き、秋深くして暝猿<sup>めいえん</sup>悲し」と夕日が沈む中、目にしたテナガサルを「暝」字で形容した表現がある。

吉川幸次郎『宋詩概説』（岩波文庫 2006、もと岩波書店 1962）序章第十二節 宋詩における自然によれば、唐詩における夕陽は激情を詠うが、宋詩になると夕陽が詠われることが少なくなり、詠われるときも快樂として詠われる、という。その例として吉川著は北宋・蘇軾「金山寺に遊ぶ（遊金山寺）」（『合注』巻 7）をとりあげ、『山僧は 苦<sup>ねんご</sup>ろに留めて落日を看しむ』るのであるが、そこに展開するのは、『微風万頃靴（引用者注：『合注』は「靴」字を「鞞」に作る）文のごとく細かに、断霞半空に魚尾のごとく赤し』、ちりめんのようなしわを大川にきざみ、魚のしっぽのような赤さを中空にたなびかせる、美しく楽しむべき夕陽であった」という。崔鶯の夕陽も激情の夕陽ではなく、その一瞬の美しさを詠ったものであろう。

（佐野誠子）



## 別裁-32 陳與義「出山」

「出山」

山空樵斧響

隔嶺有人家

日落潭照樹

川明風動花

やま むな 山 空しくして しょうぶ ひび 樵斧 響き  
みね へだ 嶺 隔てて じんか あ 人家 有り  
ひ お たん き て 日 落ちて 潭 樹を照らし  
かわ あか 川 明るくして かせ はな うご 風 花を動かす

### 【詩人小伝】

陳与義 (1090-1138)、字は去非、号は簡齋。洛陽（河南省）の人。政和三年 (1113) の進士。のち、太学博士、符宝郎を歴任。宋の南遷時に、乱を避け、南方各地を流浪した。紹興元年 (1131)、南宋政府に召されて再び出仕し、官は参知政事に至る。元の方回『瀛奎律髓』において、一祖三宗説を唱え、杜甫を江西派の祖とし、黄庭堅、陳師道、陳与義を三宗とした。『宋史』巻 445。

### 【収載】

『増広箋注簡齋詩集』巻 18、『全宋詩』巻 1745

### 【押韻】

「家」「花」：下平声 9「麻」

### 【訳】

ひっそりとした山間に樵の音が響き、  
一つ向こうの嶺に人家がぼつり。  
日は落ち夕日に染まった水面は木を照らし、  
川べりは明るく、そよ風に花が揺れる。

### 【注】

- 出山：山から世俗に出ること。山は往々にして隠逸の地として捉えられる。
- 山空：山に人氣がいなく、ひっそりとしているさま。「空」は、音のない静謐さを印象づける表現あるいは、それと相反する音を連想させる表現とともに詠まれることが多い。ここでも、「樵斧」の音とともに詠まれる。視覚だけでは捉えきれない山という空間の広がり、落ち着きを研ぎ澄まされた聴覚

においても感じ取ろうとする表現であるといえる。唐・王維の有名な詩「鹿柴」(『全唐詩』巻 128)に「空山人を見ず、但だ人語の響くを聞く」、唐・韋応物「秋夜 丘二十二員外に寄す(秋夜寄丘二十二員外)」(『全唐詩』巻 188)に「山 空しくして松子 落ち、幽人 応に未だ眠らざるべし」とある。

- 樵斧：きこりの斧。またはその音。唐・劉禹錫「裴祭酒尚書……(裴祭酒尚書……)」(『全唐詩』巻 355)に「幽谷 樵斧 響き、澄潭 釣磯<sup>めぐ</sup>を環る」とある。

### 【補説】

二首連作の第二首。『簡齋集』には、「出山二首」に続き、「入山二首」が収録されており、四首は一つながりになっている。古来より、山は隠者が住む場所である。「出山」「入山」は、いわば俗と超俗の間を行き来する行為であるといえよう。

「出山」 其一は、

陰巖不知晴	陰巖 晴るるを知らず
路轉見朝日	路 転じて朝日を見る
獨行脩竹盡	独り行きて 脩竹 尽き
石崖千丈碧	石崖 千丈 碧たり

である。山道を進み行くにつれ、目の前に現れる新たな風景を詩に写し取っている。ここ(其一)では、朝日であるのに対し、本篇である其二には、夕日に照らされた周辺の情景が詠み込まれている。両首を繋げて読むと、山を朝に出発して、暮れ時に山道を抜け出したという詩人の足取りが浮かぶ。

第三句では、夕日が直接木々を照らすとはせず、夕日の光をいったん受け止めた潭面が木々を照らすと詠む。光を受けた水面があたりを明るくすると詠うことは、唐・杜甫「月」(『全唐詩』巻 230)「四更 山 月を吐き、残夜 水 楼を明るくす」に通じている。山の中では、日が落ちるとあたりは真っ暗になるのだが、人里に出てきたからこそ、太陽の位置が低くなっても、辺りはその光を受け、例えば風に揺れる花が見えるのである。

白敦仁『陳与義集校箋』(上海古籍出版社 1990)は、南宋・王象之『輿地紀勝』が荊湖南路武岡軍(現在の湖南省邵陽市武岡市)に本篇の「山空樵斧響、隔嶺有人家」二句および「入山」其一を引くことから、「出山」「入山」の合計

四首は、建炎四年（1130）の作であろうとする。『陳与義集』（中華書局 1982）に収められている『増広箋注簡齋詩集』の編者南宋・胡穉の手になる「簡齋先生年譜」によれば、建炎四年、陳与義は難を避け、衡嶽より劬陽に至り、最終的に紫陽山に身を寄せたという。同年の秋、彼は南宋政府に召し出されて紫陽を離れ、翌年（紹興元年 1131）の夏、会稽に至る。このとき、兵部員外郎に除せられている。

『輿地紀勝』のいうように、荊湖南路武岡軍、すなわち劬陽（崇寧五年（1106）、劬陽に武岡軍が設置されている）一帯を詠んだものであれば、あるいは難を避け紫陽山に至る途中に作ったものと考えられる。そうであるとすれば、「出山」「入山」いずれも春を想起させる「花」「春色」を詠むことから、この年の春の作品となる。

（鄭月超）

## 別裁-33 陳與義「入山」

にゅうざん  
「入山」

都迷去時路

策杖煙漫漫

微雨洗春色

諸峯生晚寒

すべ まよ きょじ みち  
都て迷う 去時の路  
さくじょう けむりまんまん  
策杖 煙 漫漫たり  
び う しゅんしよく あら  
微雨 春 色を洗い  
しよほう ばんかん しよう  
諸峰 晩寒を生ず

### 【収載】

『増広箋注簡齋詩集』巻 18、『全宋詩』巻 1745

### 【校異】

「路」、『増広箋注簡齋詩集』は「景」に作る。

### 【押韻】

「漫」：去声 29「換」、「寒」：上平声 25「寒」

### 【訳】

前に来た時はどのような道を通して山を出てきたのか、はてすっかり分からなくなってしまった。

杖をつき、霞立ちこめる道を行く。

細かな雨が春の景色を一新させ、

峰々から夕暮れの寒さがわき起こる。

【注】

- 去時：本詩は前出の別裁-32「出山」との連作。「去時」は、ここでは以前この山から出てきた時という意味とする。
- 策杖：杖をついて歩くこと。杖は山歩きや旅に出るときの持ち物であり、脱俗のシンボルでもある。劉宋・陶淵明「歸去來辭」（『文選』巻 45）に「策つえつきて老を扶け以て流憩し、時に首を矯あげて游観す」、唐・王績の「策杖して隠士を尋ね（策杖尋隠士）」（『全唐詩』巻 37）に「策杖して隠士を尋ね、行き行きて路漸くゆるや 賒 かなり」とある。
- 漫漫：あまねく広がるさま。唐・杜甫「白沙渡」（『全唐詩』巻 218）に「水清く石礪礪にして、沙白く灘漫漫たり」とある。
- 微雨洗：春の小糠雨が草木を洗い清めること。唐・杜甫「大曆三年春 白帝城より船を放ち 瞿塘峽を出ず……凡そ四十韻（大曆三年春白帝城放船出瞿塘峽……凡四十韻）」（『全唐詩』巻 232）に「乾坤 漲海につちふ 霾り、雨露 春蕪を洗う」とある。
- 晩寒：夕暮れの寒さ。

【補説】

「出山」二首「入山」二首の連作四首。これらの成立時期については別裁-32「出山」を参照。この詩は「入山」二首の其二。『宋詩別裁』未収の「入山」二首其一は以下の通り。

出山復入山	山を出でて復た山に入る
路随溪水轉	路は溪水に随いて転ず
東風不惜花	東風花を惜しまず
一暮都開遍	一暮都て開くこと遍し

其一では春の山を楽しみながら、思うに任せて散策する様子が描かれている。

ひたすらに楽しんでいる、そのように思いながら其二を読み進めると、起句では主人公が道に迷い、承句では霧が立ち込めていることが示される。山の中で道に迷い、雨が降り、しかも日没が近づいているのだ。本来なら不安や焦りを感じそうなものだが、転句結句を読むと、主人公は雨により変化した景色や、日暮れとともに変化する空気の触感を味わいながら、やはり夕暮れ時の山を楽しんでいるようだ。

(大戸温子)

## 別裁-34 曹勛「題友人書後」

<sup>ゆうじん</sup> <sup>しよ</sup> <sup>あと</sup> <sup>だい</sup>  
「友人の書の後に題す」

客子得秋涼

<sup>かくし</sup> <sup>しゅうりょう</sup> <sup>う</sup>  
客子 秋 涼 を得れば

壯懷亦増慨

<sup>そうかい</sup> <sup>またがい</sup> <sup>ま</sup>  
壯懷も亦慨を増す

永念故人遠

<sup>なが</sup> <sup>おも</sup> <sup>こじん</sup> <sup>とお</sup>  
永く念う 故人 遠く

三湘渺滄海

<sup>さんしょう</sup> <sup>そうかい</sup> <sup>びょう</sup>  
三 湘 滄海 渺 たるを

### 【詩人小伝】

曹勛 (1098-1174)、字は公顯、号は松隱。<sup>ようてき</sup>陽翟 (現在の河南省禹県) の人。宣和五年 (1123) 父祖の功績により承信郎となり、同進士出身を賜った。靖康元年 (1126)、捕虜となった徽宗皇帝とともに北方の金に連行されたが、南宋 (南京) に遁げ帰った後、枢密副都承旨、提挙皇城司、開府儀同三司などを歴任した。また、たびたび使者として金に赴いた。『宋史』巻 379。

### 【収載】

『松隱集』巻 7、『全宋詩』巻 1883

### 【押韻】

「慨」：去声 19 「代」、「海」：上声 15 「海」 (通押)

### 【訳】

河北の地で虜囚となったあなたは、秋の涼しい季節になると、  
勇壮な気概も起こって、胸がいっぱいになるだろう。

昔なじみの友人と、はるか遠くに隔てられて、  
湘江の流域や、対岸が霞んで見えない大海を思い続けるばかり。

【注】

- 書：手紙。唐・杜甫「春望」（『全唐詩』巻 224）に「家書 万金に<sup>あた</sup>抵る」とある。
  - 客子：旅人。『史記』范雎伝に「諸侯客子と俱に來たる無きを得んか」とある。
  - 秋涼：秋の涼しさ、の意であるが、古来、この季節は馬を肥らせて戦いに臨む時でもあった。『魏書』爾朱天光伝に「（爾朱天光）軍を停め、馬を牧し、遠近に宣言して曰く、『今時將に熱せんとすれば、征討すべきに非ず。秋涼に至るを待ちて、別に進みて醜奴を止めんことを量れ』と」とある。
  - 壯懷：勇壯な気概。唐・殷堯藩「九日」（『全唐詩』巻 492）に「壯懷空しく擲<sup>なげう</sup>つ班超の筆」とある。「班超の筆」とは、張騫のように西域で活躍しようとし、班超が書記の職を捨てたことを言う（『後漢書』班超伝）。
  - 慨：志を得ずに憤激すること、或いは溜息。晋・潘岳「秋興賦」（『文選』巻 13）の「慨然として賦す」の李善注に「壯子の志を得ざるなり」とあり、また後漢・張衡「思玄賦」（『文選』巻 15）の「慨は<sup>なげ</sup>唏きを含みて愁いを増す」の李善注に「慨は太息なり」とある。
  - 三湘一句：「三湘」とは湖南省にある「～湘」と呼ばれる三つの川、沅湘、瀟湘、資湘を指すか、あるいは「湘～」と呼ばれる三つの地域を指すが、ここでは唐、宋詩によくある詩語として、湖南省の湘江流域及び洞庭湖のあたりを広く指しているものと考えたい。唐・李白「江夏の使君叔の席上に史郎中に贈る（江夏使君叔席上贈史郎中）」（『全唐詩』巻 170）に、「昔 三湘に放たれて去り」とある。
- 「渺」は遠くかすんで、はっきり見えないさま。「滄海」は中国の東に広がる青い大海原の意。北宋・蘇軾「赤壁賦」（『東坡集』巻 33）に「況んや吾と子と……渺たる滄海の一粟なるをや」とある。

【補説】

作者は北宋末期の動乱期の人。『宋史』曹勛伝や『資治通鑑後編』建炎元年（1127）八月以降の記事によれば、靖康の変の時、異民族の金に徽宗皇帝父子らが連れ去られた際、ともに捕えられたが、皇帝の密勅<sup>えり</sup>が領に書かれた御衣を携

えて燕山（河北省）から脱出し、間行して、高宗治下の南宋の都、臨安に帰った。密勅の内容は、「来りて父母〔皇帝・皇后〕を救え」「河を決して敵に灌がんと欲す」であったという。

詩題から、友人から受け取った手紙の末に書きつけた詩と思われるが、その友人や手紙の内容は不明である。さらに作者の自注や序、作詩状況を特定できる伝記事実も欠いているので、訳では詩題と詩句のみから解釈し得る内容にとどめた。作者は南京に戻った後、「死士を募り、海を航りて金国の東京に入り、徽宗を奉じて海道より帰」ることを建議したほどの忠臣であった。数ある可能性の一つとして、「客子」が北方で虜囚となっている友人、「壮懷」を「金に奪われた故地を奪還する思い」、「三湘」を作者のいる場所、「渺」とした「滄海」を、金との間に横たわる大海原、と考えることもできるが、如何せん、憶測の域を出ない。他にもさまざまな解釈ができよう。

（松原功）

## 別裁-35 劉子翬「早行」

そうこう  
「早行」

村雞已報晨

曉月漸無色

行人馬上去

殘燈照空驛

そんけい すで あした ほう  
村雞 已に 晨を報じ  
ぎょうげつ しょうや いろ な  
曉月 漸く色無し  
こうじん ばじょう さ  
行人 馬上に去り  
ざんとう くうえき て  
殘灯 空驛を照らす

### 【詩人小伝】

劉子翬(1101-1147)、字は彦沖。崇安（現在の福建省武夷山市）の人。恩蔭によって承務郎に補せられ、建炎四年（1130）に通判興化軍に挙げられたが、後に病を理由に故郷崇安の屏山に退き、屏山先生と号して朱熹らに学問を授けた。『宋史』巻434。

### 【収載】

『屏山集』巻10、『全宋詩』巻1912

【押韻】

「色」：入声 24「職」、「駅」：入声 22「昔」（通押）

【訳】

村の鶏はもう明け方を報せて鳴き、  
 暁の月は次第にぼんやり薄らいできた。  
 旅人は馬の背に乗って去り行き、  
 灯ったままのあかりは人気のない駅を照らす。

【注】

- 村鶏：村にいる鶏。『老子』に「隣国相望み、鶏犬の声相聞こゆるも、民老死に至るまで相往来せず」、劉宋・陶淵明「桃花源記」（『靖節先生集』巻 6）に「鶏犬相聞こゆ」とあるなど、村落の鶏の声はしばしばのどかな農村の生活象徴する。「村鶏」の語の用例としては唐・権徳輿「暁に武陽館を発し事に即して情を書す（暁發武陽館即事書情）」（『全唐詩』巻 325）に「清晨に羸車に策うち、嘲嘶たり村鶏を聞く」がある。
- 暁月：明け方の月。劉宋・謝靈運「廬陵王墓下に作る（廬陵王墓下作）一首」（『文選』巻 23）に「暁月 雲陽を発し、落日 朱方に次る」とある。
- 無色：すがたかたちが見えなくなること。ここでは空が白んできたために月が輝きを失うこと。
- 行人：たびびと。前漢・李陵「蘇武に与う（與蘇武）三首」其二（『文選』巻 29）に「行人は往く路を懷う、何を以てか我が愁いを慰めん」とある。
- 空駅：人気のない駅。「駅」とは街道を往来する官吏などが泊まったり、馬を替えたりする場所。

【補説】

作品中には難しい言葉も、難解な典故の使用もない。旅人が早朝に駅舎を発つころ、鶏が朝を告げ、月がゆっくりと白んで行く。朝の始まりと夜の終わりとが交差する、繊細な一瞬を前半二句は描く。そして、旅人が立ち去った後には、誰もいない駅舎が燃え残った灯りに照らされている。本来ならば周囲が明るくなるにつれて弱まり消えゆくかそけき灯りが朝を照らすと逆説的に描くことで、二十文字の中に朝の人気のない寂れた駅の風情を捉えている。詩題から



も情景からも、唐・温庭筠「商山早行」(『全唐詩』巻 581)の「鷄声茅店の月、人跡板橋の霜」が思い出されるが、劉子翬詩は詩人の胸中などを語ることもなく、早朝の駅舎の情景のみに焦点を絞って、より繊細な雰囲気を作り出していると言えるだろう。

(高芝麻子)

## 別裁-36 陸游「梅花絶句」

ばいかぜっく  
「梅花絶句」

低空銀一鉤

糝野玉三尺

愁絶水邊花

無人問消息

そら た ぎんいつこう  
空に低る 銀一鉤  
の ち ぎよくさんしゃく  
野に糝る 玉 三尺  
しゅうぜつ すいへん はな  
愁絶す 水辺の花  
ひと しょうそく と な  
人の消息を問う無し

### 【詩人小伝】

陸游 (1125-1210)、字は務観、号は放翁。晩年、亀堂老人と号す。越州山陰(現在の浙江省紹興県)の人。紹興二十四年(1154)殿試の時、秦檜の怒りに触れて退けられ、秦檜没後の紹興三十二年(1162)に進士出身を賜った。官職として、鎮江府通判、夔州通判など各地の地方官を歴任。成都では、四川制置使の范成大(1126-1193)に仕えた時期もあった。その後朝廷に召還されて、実録の編纂に従事。晩年は郷里で晴耕雨読の日々を送った。『宋史』巻 395。

### 【収載】

『劔南詩稿』巻 24、『全宋詩』巻 2177

### 【押韻】

「尺」：入声 22 「昔」、「息」：入声 24 「職」(通押)

### 【訳】

低空に銀のかぎはかかり、  
野には散り敷く三尺の玉。  
水辺の花は愁いに沈む。

おとなう人もなければ。

【注】

- 銀一鉤：月のことを指す。陸游は他に「晚晴閑歩隣曲の間を閑歩し賦する有り（晚晴閑歩隣曲間有賦）」詩（『劔南詩稿』巻 49）にて「楼陰に雪在り 玉三寸、雲罇<sup>うんか</sup>に月生ず 銀一鉤」と、本詩の第一二句と相通じた句を詠んでいる。
- 糝：粒状のもの。転じて散らすの意。唐・杜甫「絶句漫興九首」其七（『全唐詩』巻 227）に「径に糝りて 楊花 白蘊を鋪き、溪に点じて 荷葉 青錢を畳む」とある。
- 玉三尺：ここでは、降り積もった雪が三尺の高さになったこと。陸游の「龜堂漫興」其三（『劔南詩稿』巻 41）に「一夜 山中 三尺の雪、未だ老子の日高くして眠るを妨げず」とある。
- 愁絶：この上なく憂えること。唐・杜甫「京自り奉先県に赴く 詠懷五百字（自京赴奉先縣詠懷五百字）」（『全唐詩』巻 216）に「沈飲して 聊か自適し、放歌して 頗る愁絶す」とある。
- 水辺花：ここでは梅の花。
- 問消息：音信を訪ねる。唐・杜甫「稻を刈ること了りて詠懷す（刈稻了詠懷）」（『全唐詩』巻 229）に「家の消息を問う無く、客と作り乾坤に信す<sup>なまか</sup>」とある。

【補説】

本詩は紹熙二年（1191）の冬、山陰（現在の浙江省紹興市）にての作品、「梅花絶句」十首の第四首である。

銀色の三日月に照らされ、雪は玉の如き輝きを放つ。月光も雪も冷たい白色であり、一面に銀の世界になる。この白くて静かな世界の中、誰にも気づかれることもなく、寂しく川辺に咲く梅があった。

前半二句は劉宋・謝靈運「歳暮詩」（『芸文類聚』巻 3）にある名句「明月 積雪を照らす」と相似た情景を描いている。しかし謝靈運とは異なり、陸游は敢えて「月」と「雪」の字を避けるという工夫をした。後半二句は水辺に咲く梅花が、寒い世界にひとりたたずみ、だれにも気かけられない様子を詠う。その孤独な姿には詩人自身の姿が投影されているのかも知れない。なお、孤独に咲いた水辺の梅花を詠んだ先例には、北宋・蘇軾「梅花二首」其二（『合注』巻

20) の「何人か酒を把りて深幽を慰む、開きて自ら無聊 落ちて更に愁う。幸いに清溪三百曲あり、辞せず 相送りて黄州に到るを」が挙げられる。

「梅花絶句」其六には、「子 梅詩を作らんと欲すれば、当に造るべし幽絶の境」とある。本篇に描かれた世界はまさに、梅花詩を作るにあたっての「幽絶の境」といえよう。

(許喬)

## 別裁-37 陸游「梅花」

ばいか  
「梅花」

春信今年早

江頭昨夜寒

已教清徹骨

更向月中看

しゅんしん ことしはや  
春 信 今年早けれど

こうとう さく やさむ  
江頭 昨夜寒し

すで きよ ほね てっ  
已に清きをして骨に徹せしむ

さら げっちゅう お み  
更に 月 中に向いて看ん

### 【収載】

『劔南詩稿』巻 44、『全宋詩』巻 2197

### 【押韻】

「寒」「看」：上平声 25「寒」

### 【訳】

春のたよりが今年はやかったが、  
川辺には昨夜の寒さが漂っている。  
(梅花には) 冷たい寒気が中まですっかり染み入った様子、  
今度は月明かりの下で、その姿を見としよう。

### 【注】

- 春信：春のたより。春の兆し。ここでは梅の花が綻んだことをかく詠む。南宋・呂本中「滕尉の梅を送るに謝す（謝滕尉送梅）」（『東萊詩集』巻 18）に「忽ち梅花の陋巷に来たる有り、喜びて春信の初冬に出ずるを聞く」という。
- 江頭：頭は接尾辞。辺と同じ。

- 已教一句：「清」は、ここでは名詞で澄み切った寒気、清寒の意。「徹骨」は、骨、つまり内部まですっかり染み入ること。第二句を承けて、昨晚の名残である寒気が梅花の内部へと染み渡り、花は一層清らかに咲き誇る、と詠う。梅花の清婉たる美しさを、間接表現によって称えた。陸游は他にも「漣漪亭に梅を賞ず（漣漪亭賞梅）」（『劔南詩稿』巻 9）に「真を写す 妙絶 窓を横ぎる影、骨に徹す 清寒 水に蘸<sup>ひた</sup>る枝」と、本詩と似た表現がみえる。
- 向月中：「向」は、ここでは「在」に同じ。～において。「月中」は、月の照らす中の意。唐・白居易「山下に宿る（山下宿）」（『全唐詩』巻 430）に「独り山下に到りて宿り、静かに月中に向いて行く」という。第三句を承けて、その梅花を月夜の中で見たら一層すばらしいだろう、と期待する。

### 【補説】

本詩は連作詩「梅花」五首の第四首にあたり、他の四首と違って詩句に「梅」字を用いていないという特徴がある。

他の花に先駆けて咲く梅花の姿は、唐代の詩人たちも関心を寄せていた。例えば唐・孟浩然「早梅」（『全唐詩』巻 159）に「園中に早梅有り、年例 寒を犯して開く」とある。だが、冷え冷えとした寒気を清の一字で表し、それが梅花の「骨」に染み入ったという陸游の表現は奇抜である。これは恐らく、花の種類は異なるが、北宋・蘇軾の「雨中に牡丹を看る（雨中看牡丹）三首」其二（『合注』巻 20）に「清寒 花の骨に入り、肅肅として 初めて自ら持す」句を応用した表現と思われる。花卉の輝く<sup>しろ</sup>皓さは、その内側まで染み入った寒気によって発せられる、と考えたのだろう。

なお本詩を含む連作の其三・四・五には相呼応した関係が見出せる。まず其三で「梅と友と為らんと欲すれど、常に渠と称わざるを憂う」といい、梅花を心の友と慕う気持ちが描かれる。次いで本詩（其四）では月明かりの梅花を觀賞したいと述べる。これらの意を承けるように、第五首では「江上 梅花吐き、山頭に霜月明るし。摩挲す 古藤の杖、三友として 盟を同にすべし」と詠う。川辺に咲き誇る梅花を月夜に觀賞する情景を描き、更に陸游は梅花と月に藤の杖を併せて三友と称し、己の親しむものとした。或いは、これらを友に選ぶことで翻って自身の精神の高潔さを示してもいるだろう。

慶元六年 (1200) 陸游七十六歳、紹興での作。

(加納留美子)

## 別裁-38 陸游「物外雜題」

ぶつがいざつだい  
「物外雜題」

粉堞臨江渚

朱橋枕市樓

長吟策小蹇

又度一年秋

ふんちよう こうしょ のぞ  
粉 堞 江渚に臨み  
しゅきよう しろう のぞ  
朱 橋 市樓に枕む  
ちようぎん しょうけん むち  
長 吟 して 小 蹇 に 策 うち  
ま わた いちねん あき  
又 た 度 る 一 年 の 秋

### 【収載】

『劍南詩稿』卷 46、『全宋詩』卷 2199

### 【押韻】

「樓」：下平声 19「侯」、「秋」：下平声 18「尤」（同用）

### 【訳】

白塗りのひめがきが川べに臨み、  
朱い橋は街の酒樓を近く見下ろす。  
詩を声長く吟じつつロバにむち打ち、  
こうしてまた一年たって秋を迎える。

### 【注】

- 物外：世俗の外。超俗の世界。後漢・張衡「歸田賦」（『文選』卷 15）に「苟も心を物外に 縦<sup>ほしいまま</sup> にせば、安んぞ榮辱<sup>ゆ</sup>の如く所を知らんや」。
- 粉堞：白い顔料を塗られたひめがき。唐・杜甫「秋興八首」其二（『全唐詩』卷 230）に「画省の香爐 違いて枕に伏し、山樓の粉堞 隠れて悲筳あり」。
- 枕：臨む。近くにあること。唐・杜甫「滕王亭子」（『全唐詩』卷 228）に「君王の台榭 巴山に枕み、万丈の丹梯 尚お攀ずべし」。
- 市樓：街中の酒樓。唐・許渾「郊居 春日府中の諸公並びに東王兵曹を懷う有り（郊居春日有懷府中諸公并東王兵曹）」（『全唐詩』卷 536）に「僧舎に碁を

覆して白日を消し、市楼に酒を<sup>おぎの</sup>賒りて青春を過す」。

- 策：むちうつ。
- 小蹇：ロバ。陸游詩にしばしば詠われる。本篇を含む「物外雜題八首」連作の其六に「驢を飼いて野店に留め、菜を買いて山城に入る」。
- 又度一句：一年が過ぎ再び秋を迎える。唐・韋応物「夜流螢に対して作る（夜對流螢作）」（『全唐詩』193）に「還た故園の夜を思い、更に度る一年の秋」。

### 【補説】

嘉泰元年(1201)夏、山陰での作。同題の八首連作の第五首。陸游七十七歳、淳熙十六年(1189)職を辞して以来、祀禄を受けつつ故郷にあった時期の作。前半二句は、「粉堞」と「朱橋」という色彩の対比。川と橋は江南の地の街になじみのものであろうし、陸游は水に舟を浮かべる詩をしばしば作っている。また同じ「物外雜題」其一に「市墟に斗酒<sup>か</sup>を沽い、独酌復た高歌す」と詠われるように、「市楼（酒亭）」もまた詩人と分かちがたい関係にあった。後半二句は詩人として過ごす日々への感慨。注にも指摘したように、陸游詩にはロバとその背に揺られる自らの姿が少なからず書き込まれている。

時をさかのぼって乾道八年(1172)四十八歳の陸游は、金に対する前線の南鄭（現在の陝西省南鄭市）から成都安撫司の参議官に移され、不本意ながら劍門を越え南に向かう。そのときの作、「劍門道中にて微雨に遇う（劍門道中遇微雨）」（『劍南詩稿』巻3）の「此の身<sup>まさ</sup>合に是れ詩人なるべきや未だしや、細雨驢に騎って 劍門に入る」の句について小川環樹は、勇士として北伐の功をたてる夢を今はや失い、これからは「ロバにのる」詩人として生きるしかないのかという問いを自らに投げかけるものだという。小川環樹「詩人の自覚—陸游の場合」（『風と雲』朝日新聞社 1972）、また小川『陸游』（筑摩書房 1974）の「詩の風景・ロバの背の詩人」（いずれも『小川環樹著作集』3、筑摩書房 1997 所収）参照。三十年の時を経て詠われたこの詩のなかにも、詩人として生きるいくばくかの苦みがなお流れている。

（和田英信）

## 別裁-39 陸游「柳橋晩眺」

りゅうきょうばんちょう  
「柳橋晩眺」

小浦聞魚躍

横林待鶴歸

閒雲不成雨

故傍碧山飛

しょうほ さかな おど き  
小浦 魚の躍るを聞き  
おうりん つる かえ ま  
横林 鶴の歸るを待つ  
かんうん あめ な  
閒雲 雨を成さず  
ことさら へきざん そ と  
故 に碧山に傍いて飛ぶ

### 【収載】

『劍南詩稿』卷 47、『全宋詩』卷 2200

### 【校異】

「閒」、『劍南詩稿』『全宋詩』は「閑」に作る。

### 【押韻】

「歸」「飛」：上平声 8「微」

### 【訳】

小さな浦に魚が飛び踊る音を聞き、  
横たわるように長く続く林に鶴が歸るのを待つ。  
静かに浮かぶ雲は雨を降らさず、  
わざと青い山に寄り添うように飛んでいく。

### 【注】

- 柳橋：柳の木が生える橋。唐・白居易「三月三日洛濱に祓禊す（三月三日祓禊洛濱）」（『全唐詩』卷 456）に「柳橋 晴れて絮有り、沙路潤いて泥無し」とある。錢仲聯『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社 1985）卷 46「戯れに絶句を作り、唐人の句を以て之を終う」に附される注は、紹興に実在した橋であるとする『乾隆浙江通志』の記載などを根拠に、「柳橋」を橋の名と取る。陸游はこの詩の他に「柳橋」や「柳橋秋夜」など、「柳橋」を詠んだ詩を多数作っている。
- 晩眺：夕方の眺め。唐・王勃「山居晩眺王道士に贈る（山居晩眺贈王道士）」（『全唐詩』卷 56）がある。陸游には「晩眺」を用いた作品がこの詩を含めて

十一首ある。

- 魚躍：魚が水面を跳ねること。『詩経』大雅「旱麓」に「鳶 飛<sup>いた</sup>びて天に<sup>いた</sup>戻り、魚 淵に躍る」、晋・束皙「補亡詩六首」其四（『文選』巻 19）に「獸は在りて草に<sup>あ</sup>ずり、魚は躍りて流れに順う」とある。
- 横林一句：『詩経』小雅「白華」に「鳶有りて梁に在り、鶴有りて林に在り」とある。唐以前の詩には見えず、早期の例には南宋・陳与義「南嶂に遊びて孫信道と<sup>とも</sup>にす（遊南嶂同孫信道）」（『増広箋注簡齋詩集』巻 18）詩がある。『全宋詩』には「横林」の用例は四十七首見られるが、そのうち陸游の作品が二十六首を占める。起句の「小浦」に対して「横林」が用いられていること、陸游が「舍北揺落し景物殊に佳なり偶作（舍北揺落景物殊佳偶作）五首」其三で「小聚鷗沙の北、横林蟹舍の東」（『劍南詩稿』巻 35）などと詠んでいることを考えると、ここでは視界一杯に横に長くつづく林の意か。
- 間雲：静かに流れる雲。唐・王勃「滕王閣」（『全唐詩』巻 55）に「間雲潭影日に悠悠、物換わり星移りて幾秋をか度る」とある。
- 碧山：木が青々と茂った山。唐・韓偓「重ねて和す（重和）」（『全唐詩』巻 682）に「嘉樹 楼に倚りて青瑣暗く、晚雲 雨を蔵して碧山寒し」とある。

#### 【補説】

嘉泰元年（1201）の作。水辺に躍る魚の音を耳にした作者は、「魚」が「躍り（大雅「旱麓」）、「鶴」と「林」（小雅「白華」）を詠う『詩経』のモチーフに導かれ、横たわる林の向こうに鶴が舞い戻るのを求めた。そして鶴が飛んでいないかと思上げた空には雲が浮かぶ。自分がいる橋の近くの様子から、離れた林、更には上に目を転じる、といったように、徐々に広がる視界を詠うことで、自然を楽しむのんびりした気持ちを述べつつ、作者を取り巻く世界を深めているように思われる。結句で「故」の文字を使用したのは、白い雲と緑の山々との対比を言いたい為であろう。

（山崎藍）



## 別裁-40 陸游「雪晴欲出而路澁未通戲作」

<sup>ゆきは</sup>「雪晴れて<sup>い</sup>出でんと<sup>ほつ</sup>欲すれど<sup>みちぬかる</sup>路澁<sup>いま</sup>みて未だ<sup>つう</sup>通ぜず<sup>たわむ</sup>戯れに<sup>つく</sup>作る」  
 欲<sup>けいとう</sup>覓<sup>みち</sup>溪頭<sup>もと</sup>路<sup>ほつ</sup>  
 春<sup>しゅんでい</sup>泥<sup>ゆ</sup>不可<sup>かえ</sup>行<sup>き</sup>  
 歸<sup>しょうそう</sup>來<sup>もと</sup>小<sup>しんせい</sup>窓<sup>み</sup>下  
 袖<sup>て</sup>手<sup>そで</sup>看<sup>しんせい</sup>新<sup>み</sup>晴<sup>み</sup>

### 【収載】

『劔南詩稿』卷 80、『全宋詩』卷 2233

### 【押韻】

「行」：下平声 12「庚」、「晴」：下平声 14「清」（同用）

### 【訳】

谷川のほとりの道を行こうとしたが、  
 ぬかるんだ春の道の泥に阻まれて、それ以上進むことができなかった。  
 家に戻り小窓の下で、  
 手を袖に入れたまま、雨上がりの晴天を見る。

### 【注】

- 欲覓一句：覓は、もとめる、探すこと。溪頭は谷川のほとり。谷川沿いの道を探しながら進んで行こうとしたが。唐・白居易「王道士の藥堂を尋ぬ 因りて贈題有り（尋王道士藥堂因有題贈）」（『全唐詩』卷 439）に「行き行きて路を覓めて松嶠に縁り、歩歩 花を尋ねて杏壇に到る」、唐・王績「晩年志を叙し翟處士に示す（晩年叙志示翟處士）」（『全唐詩』卷 37）に「歸り來たる南畝の上、更に坐す北溪の頭」とある。
- 春泥：雪解けによりぬかるんだ泥。唐・杜甫「雨ふりて蘇端を過る（雨過蘇端）」（『全唐詩』卷 217）に「藜を杖つきて春泥に入る、食無くして我を起こすこと早し」とある。
- 袖手：手を袖の中に入れること。手出しをしないで悠然と傍觀すること。唐・韓愈「石鼎聯句」序（『全唐詩』卷 791）に「道士啞然として笑いて曰く、

子が詩<sup>か</sup>是く<sup>か</sup>の如きのみ、即ち手を袖にして肩を聳かし、北牆に倚りて坐す」とある。北宋・蘇軾「沁園春・孤館灯青」(『東坡詞』)に「用舎時に由る、行蔵我に在り、手を袖にして何ぞ閑処に看るを妨げん」とある。

- 新晴：雨が上がったばかりの晴れた空。晋・潘岳「閑居賦」(『文選』巻16)に「微雨新晴、六合清朗」とある。また、唐・王維「新晴野望」(『全唐詩』巻125)に「新晴 原野曠く、極目 氛垢無し。郭門 渡頭に臨み、村樹 溪口に連なる」とある。

### 【補説】

嘉定元年(1208)冬、山陰にて、陸游八十四歳の作。陸游は致仕したのちに嘉泰二年(1202)に再度出仕し、翌三年(1203)に実録を完成させて職を辞し、郷里に戻った。

行きたい場所へ行けないもどかしさや口惜しさが感じられる一方、四句目の「手を袖にして新晴を看る」には、思うように任せないことに対しても、悠然と構え、自然の姿を楽しむかのような視線が感じられる。故郷での晩年の暮らしの中で、官職を離れ、自然と共に心のどかに暮らす作者の姿が想像される。本詩は『劔南詩稿』では二首連作の第一首であり、二首目は以下の通り。

雪消重作雨	雪消えて重ねて雨と作り
氷釋又成泥	氷 <sup>と</sup> 釈けて又た泥と成る
既敗筇枝興	既に敗る筇枝の興
高眠聽午雞	高眠して午鶏を聴く

(大戸温子)

## 別裁-41 朱熹「西寮」

「西寮」<sup>せいりょう</sup>

畚田種胡麻	た <sup>た</sup> や <sup>や</sup> を畚 <sup>ご</sup> きて胡 <sup>ま</sup> 麻 <sup>う</sup> を種え
結草寄林樾	くさ <sup>くさ</sup> むす <sup>むす</sup> てりん <sup>りん</sup> えつ <sup>えつ</sup> よ <sup>よ</sup> に寄す
珍重無心人	ちん <sup>ちん</sup> ちよう <sup>ちよう</sup> むしん <sup>むしん</sup> ひと <sup>ひと</sup> 珍重す 無心の人

寒棲弄明月

こごす めいげつ ろう  
寒え棲みては 明月を弄す

### 【詩人小伝】

朱熹 (1130-1200)、字は元晦、仲晦。号に晦庵、雲谷老人などがある。祖籍は徽州婺源（現在の江西省上饒市）、南劍州尤溪（現在の福建省三明市）の出身。紹興十八年 (1148) の進士。高宗、孝宗、光宗、寧宗の四朝に仕え、官は宝文閣待制に至る。また、著作と教育とに力を注ぎ、理学の大成者となった。諡は文、朱文公あるいは朱子と尊称される。『宋史』巻 429。

### 【収載】

『朱文公文集』巻 6、『全宋詩』巻 2388

### 【押韻】

「樾」「月」：入声 10「月」

### 【訳】

焼き畑をして胡麻を植え、  
庵を結んで林のあいまに身を寄せる。  
無欲の人は慕わしいものだ、  
凍えつつも明るい月を楽しんでいる。

### 【注】

- 西寮：「寮」とは小屋。雲谷にあった。補説参照。
- 畚田：焼き畑をする。焼き畑。唐・杜甫「戯れに俳諧体を作りて悶を遣る（戯作俳諧體遣悶）二首」其二（『全唐詩』巻 231）に「瓦トは神語を伝え、畚田は火声を費やす」とある。
- 種胡麻：胡麻を植え育てること。ここでは道士の暮らしを象徴している。唐・盧綸「樓觀に李尊師を過る（過樓觀李尊師）」（『全唐詩』巻 279）に「知らず塵俗の土、誰か胡麻を種うるを解せん」とある。晋・葛洪『神仙伝』『魯女生』には五穀を断って胡麻を服用し、八十年経っても若々しく健勝だった仙女の記事を載せるなど、胡麻は神仙の食べ物として知られていた。
- 結草：庵を結ぶ。
- 林樾：林の中にできた空き地。唐・皎然「李司直縦……に酬ゆ（酬李司直縦……）」（『全唐詩』巻 815）に「遂に永公と期し、遺身は林樾に坐す」と

ある。

- 無心：打算がない。さかしらがない。劉宋・陶淵明「歸去來辭」（『文選』巻 45）に「雲は無心にして以て岫<sup>しゅう</sup>を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る」とある。
- 寒棲：凍えて過ごすこと。晋・陸機「猛虎行」（『文選』巻 28）に「饑えては猛虎の窟に食らい、寒<sup>こ</sup>えては野雀の林に棲む」とある。

【補説】

この詩は『晦庵集』、『全宋詩』では「雲谷二十六詠」という二十六首連作の十三首目にあたる。

雲谷は朱熹「雲谷記」（『晦庵集』巻 78）の記述に従えば、現在の福建省南平市の西北七十里（約四十キロ）の場所にある。「西寮」は雲谷の西側の山中にある粗末な小屋で、そこに住み、耕作をする道士たちがいたという。なお、「雲谷記」が淳熙二年（1175）七月の作であり、内容の重なり合うところの多いことから、「雲谷二十六詠」も同じ時期に作られた可能性が高いだろう。

（高芝麻子）

## 別裁-42 張孝祥「野牧圖」 其一

「野牧図」

呉牛三十角

久與牧相忘

忽憶淮南路

春風滿柘岡

ごぎゅう さんじっかく  
呉牛 三十角

ひさ ぼく あいわす  
久しく牧と相忘る

たちま おも わいなん みち  
忽ち憶う淮南の路

しゅんぶう しゃこう み  
春風 柘岡に満つるを

【詩人小伝】

張孝祥（1132-1170）、字は安国。于湖居士と号す。本籍は歴陽烏江（現在の安徽省馬鞍山市）であるが、生地は明州鄞県（現在の浙江省寧波市）。紹興二十四年（1154）の進士第一。合格後、すぐさま岳飛を弁護する文章を上奏したため、秦檜ににらまれ、簽書鎮東軍節度判官となる。その後、浮沈を繰り返し、

中央官と地方官を行き来する。詞人・書家としても有名。『宋史』巻 389。

【収載】

『于湖居士文集』巻 12、『全宋詩』巻 2408

【校異】

題、底本は「野牧園」に作るが、『于湖居士文集』により「野牧圖」に改める。

【押韻】

「忘」：下平声 10「陽」、「岡」：下平声 11「唐」（同用）

【訳】

六頭の呉の牛、  
ながらく牛飼と互いに存在を忘れている。  
ふと淮南の地へと続く路のことを思い出した、  
あの柘岡に春風が吹き渡っていたのを。

【注】

- 呉牛：呉の地に生息する牛。唐・陸龜蒙「五歌 放牛」（『全唐詩』巻 621）に「江草秋窮まるも秋半ばに似たり、十角の呉牛江岸に放つ」とある。
- 角：牛の頭数を数える単位。『史記』貨殖列伝に「牛蹄角千」とあり、『史記集解』が『漢書音義』をひいて、「百六十七頭なり」と注している。一頭の牛に蹄が四つ、角が二本あり、蹄と角が合計千あるということは、千割る六で、およそ百六十七頭の牛を指す、ということになる。『漢語大詞典』「十角」項は、そこから、「呉牛」項で引用した陸龜蒙の歌の「十角呉牛」は、十二蹄角（蹄と角と合わせて十二）を概数で略したものであり、二頭の呉牛を意味するという。このように考えると、この詩の三十角は六頭の牛を指すことになる。
- 牧：牛飼い。
- 淮南路：淮南は淮水の南側、一般には安徽省、江蘇省のあたりを指す。宋代においては、淮南路という行政単位があり、それは、淮水以南、長江以北の一带を範囲としていた。ただし、『史記』黥布伝には、「（黥）布遂に符を剖きて淮南王と為り、都六、九江、廬江、衡山、豫章郡皆（黥）布に属す」とある。この記述によれば、淮南国は、安徽省、江蘇省にとどまらず、広く南方の江西省にまで範囲が広がっていたことがわかる。張孝祥が長官を勤めた撫

州（現在の江西省撫州市）は、前漢代には豫章郡であった。ここから、この詩では、撫州地域、あるいはそこへと続く道のことを淮南路と呼んだものと考ええる。補説参照。

- 柘岡：丘陵の名。江西省金溪県の西にある。北宋・王安石が読書堂を構えた場所。王安石「柘岡」（『李壁注』巻 44）に「柘岡の西路花は雪の如し、首を回らせば春風最も憐れむべし」に詠まれるなどし、その後詩語として定着した。補説参照。

### 【補説】

「野牧圖二首」のうち其一。其二も別裁-43 に収録される。

おそらく「野牧圖」という絵画について詠った詩であろうが、「野牧圖」という絵に関する情報はみつからない。そのため、詩に書かれた内容もいまひとつわかりにくい。この詩が春を詠っており、次の詩が秋を題材にしていることから、春と秋の放牧の情景を描いた二幅の絵だったのだろうか。

後半の「憶」の主語は、詩人本人ととらえた。「野牧圖」其一には、呉牛、そして別裁-43 の其二には、稲のひこばえ孫が描かれることから、絵は呉の地域を描いたものだったのだろう。しかし、詩人は、呉とは関係なく、自分がかつて暮らした土地を想起したと解釈した。

「柘岡」は語注にあげたように、王安石が詩に詠んで以来、宋詩で使われるようになった詩語である。王安石が詠んだ江西省金溪県にある丘陵を直接指して詠むことがほとんどである。金溪県は北宋時、撫州に属していた。張孝祥は、『宋史』の伝によると、三十歳になる前に撫州の長官となっている。この頃に柘岡を訪れる機会があったのだろう。撫州は、当時の行政区分では、江南西路に属するが、語注で示したように、金溪県を含む撫州は、前漢時代には、淮南国に入れられていた。そのために、結句では淮南路の語を用いたものと考えられる。このように、この詩は、張孝祥が撫州を離れたあと、隆興元年（1163）から亡くなる乾道七年（1170）の間に製作されたと推定できる。

（佐野誠子）

## 別裁-43 張孝祥「野牧圖」其二

「野牧図」

秋晩稻生孫

催科不到門

人閑牛亦樂

隨意過前村

あき く いね ひこばえ しょう  
秋 晩れて 稻 孫 生じ

さい か もん いた  
催科 門に到らず

ひと かん うし またたの  
人 閑にして牛も亦樂し

い したが ぜんそん す  
意に 随い 前村を過ぐ

### 【収載】

『于湖居士文集』巻12、『全宋詩』巻2408

### 【押韻】

「孫」「門」「村」：上平声 23「魂」

### 【訳】

秋の暮れ、刈り残された稲は再び芽吹き、  
税の取立てに門を叩かれることはない。  
人はのんびりと、牛もまた悠々として、  
心の赴くままに近くの村落を通り過ぎゆく。

### 【注】

- 秋晩：晩秋。
- 稻生孫：刈り残った稲の株から新たに芽を吹くこと。南宋・范成大『呉郡志』巻30に、一年に二度実をつける稲、「再熟稻」について以下のように記す。「今 田間豊歳にして、已に刈りて稻根復た蒸ずるあり。苗は極めて長じ易く、旋いで復た実を成して掠取すべし。之を再撩稻と謂う」と。「稻生孫」もおそらくこの類の稲であろう。『呉郡志』には北宋・蔣堂の詩「呉江亭を登る（登呉江亭）」も載せており、「嚮日 草 青くして牛 犢を引き、秋を経て 田 熟して稻 孫を生ず」とある。
- 催科：租税の徴収。

### 【補説】

「野牧図二首」の其二。其一と同じように絵に基づいて詠んだ作品であると

考えられる。

本篇は、晩秋の情景を詠う。稲の新芽が再び芽吹いた畑のすぐそばにいる「人」と「牛」の姿を描く。「秋晩」なのですでに税は納め終え、そのうえ稲は「再熟」の様子を見せている。「催科」の愁いから解き放たれた「人」の「閑」に呼応するように、「牛」も「随意」である。ここに詠われているのは、どこまでも長閑な農村風景であるといえよう。制作年代は 42「野牧図」其一参照。

(鄭月超)

## 別裁-44 葛天民「春晚」

しゅんぱん  
「春晚」

向晩一鳩鳴

道人春睡足

無處寫幽懷

巡檐數脩竹

ばん む いっきゅう な  
晩に向かいて 一鳩鳴き  
どうじん しゅんすい た  
道人 春睡足る  
ゆうかい うつ ところ な  
幽懷を写す 処 無く  
ひさし めぐ しゅうちく かぞ  
檐を巡り 脩竹を数う

### 【詩人小伝】

葛天民（生卒年未詳）、字は無懷。山陰（現在の浙江省紹興市）の人。僧籍に入り、名を義銛、字を朴翁に改めた。その後還俗して杭州西湖に隠居し、柳下と号して閑適の暮らしを送った。楊万里や姜夔らと交流があり、詩の応酬をしていた。南宋の江湖詩人の一人。

### 【収載】

『葛天民小集』（『江湖小集』巻 67）、『葛無懷小集』（『両宋名賢小集』巻 285）、『全宋詩』巻 2725

### 【校異】

「春晚」、『葛天民小集』、『全宋詩』は「春懷」に作る。

### 【押韻】

「足」：入声 2「沃」、「竹」：入声 1「屋」（通押）

### 【訳】



夕暮れに差し掛かり、一羽の鳩の鳴き声が聞こえてくる。

道人（である私）は、もう十分に春の眠りに浸った。

心の奥底にある思いを吐露する相手もなく、

家の周りを行き来しては、高く育った竹を数えてみる。

#### 【注】

- 向晩：夕暮れに差し掛かる。唐・李白「校書叔雲に<sup>はなむけ</sup> 餞す（餞校書叔雲）」（『全唐詩』巻 177）に「晩に向かいて 竹林寂たり、人無くして 空しく閉関す」という。
- 一鳩：鳩は春を告げる鳥として、古来詩に詠まれていた。唐・王維「春中 田園の作（春中田園作）」（『全唐詩』巻 125）に「屋上 春鳩鳴き、村辺 杏花白し」という。
- 道人：仏道に帰依して修行する者を指す。唐・韓愈「僧澄観を送る（送僧澄観）」（『全唐詩』巻 342）に「借問す<sup>しゃもん</sup> 経営せるは 本と何人か、道人澄観 名は籍籍」という。
- 無処一句：「無処写」は、思いを吐露する場がないということ。唐・白居易「江州自り忠州に至る（自江州至忠州）」（『全唐詩』巻 434）に「前往 潯陽の日、已に歎く 賓朋の寡なきを。忽忽として憂懷を抱き、門を出ずるも写す 処無し」という。「幽懷」は心中深くに抱く思いのこと。
- 巡檐：「檐」はここでは建物を意味し、「巡檐」は建物の周りを行き来すること。唐・杜甫「舍弟観の藍田に赴きて妻子を取り 江陵に到れるを喜びて寄す（舍弟観赴藍田取妻子到江陵喜寄）三首」其二（『全唐詩』巻 231）に「檐を巡り索めて梅花の笑うを共にせん、冷蕊 疏枝 半ば禁ぜず」とあり、『杜詩詳注』の注釈者である清・仇兆鰲は、「檐檻を歩繞す」と注する。
- 数脩竹：「脩竹」は長くのびた竹のこと。「数」は、動詞の数えるの意に取った。

#### 【補説】

特殊な詩語は用いられていないが、恐らく意図的に感情を表す語句が排されており、解釈に戸惑いを覚える作品である。

前半二句、夕暮れ時にあって道人は眠りから目を覚ます。それは昼働き夜に眠る一般的な生活とは正反対の行為であり、ここに世間と関わりを持たずに生

きる超然性、或いは孤独感が読み取れる。

第三句は、白居易の詩を踏まえたものだろう。白居易は、独り異郷にあって、自己の憂いを伝える人がいないと嘆いた。続く第四句の「巡檐」は、杜甫詩に先例がある。杜甫は弟が遠方より妻子を連れて訪ねてきてくれるのを知り、待ち望む思いをこの語で表した。後半二句を通して、詩人もまた孤独感を覚えていたことが窺える。何よりも、春の夜であるにも関わらず、花咲かぬ竹を数えるその行為には、言い知れぬ寂しさが漂っている。

(加納留美子)

## 別裁-45 葉茵「有所思」

「思<sup>おも</sup>う所<sup>ところ</sup>有<sup>あ</sup>り」

仰天有所思

心遠目苦短

西風驅殘雲

千里月華滿

天<sup>てん</sup>を仰<sup>あお</sup>いで思<sup>おも</sup>う所<sup>ところ</sup>有<sup>あ</sup>り  
心<sup>こころ</sup>は遠<sup>とお</sup>く目<sup>め</sup>は苦<sup>はなは</sup>だ短<sup>みじか</sup>し  
西<sup>せい</sup>風<sup>ふう</sup> 残<sup>ざん</sup>雲<sup>うん</sup>を驅<sup>か</sup>り  
千<sup>せん</sup>里<sup>り</sup> 月<sup>げ</sup>華<sup>っか</sup>満<sup>み</sup>つ

### 【詩人小伝】

葉茵 (1199?-?)、字は景文。笠沢（江蘇省蘇州）の人。いわゆる南宋の江湖詩人の一人。

### 【収載】

『順適堂吟稿』（『江湖小集』巻 39）、『順適堂吟稿続集』（『兩宋名賢小集』巻 294）、『全宋詩』巻 3185

### 【押韻】

「短」「満」：上声 24「緩」

### 【訳】

天をふり仰いで嘆くのは、あの人を思うから。  
心は遠くはせるけど、目の届くのはほんの近くまで。  
いましも西風が、消え残る雲を吹き払い、

千里をへだてて、ともに月の光に満たされる。

【注】

- 有所思：樂府題。古辞としては、相手の不実による恋の破綻をうたう「思う所有り、乃ち大海の南に在り」に始まるものが伝わる（『宋書』樂志四、『樂府詩集』卷 16）。南齊以降の詩人の同題の作は、多く孤閨を守る女性の孤独、嘆きを詠う閨怨詩（『樂府詩集』卷 17）。
- 仰天：哀しみ、嘆きを訴えるしぐさ。『楚辞』九思・悼乱に「天を仰いで増ます歎く」。魏・曹植「三良詩」（『文選』卷 21）に、「涕を攬りて君の墓に登り、穴に臨み天を仰いで歎く」。
- 心遠一句：「長」と「短」を対比させるレトリック。「古詩十九首」其十五（『文選』卷 29）に「昼は短く夜の長きに苦しむ」。ここでは「遠」と「短」にアレンジし、思いを寄せる相手が遠くにある一方、目の届く距離が短いこと、すなわち会えないことを嘆く。
- 西風一句：「西風」は、秋の風。唐・李白「長干行」（『全唐詩』卷 26 及び 163）に「八月西風起ち、君を想いて揚子を発す」。「残雲」は、空にまばらにのこる雲。
- 千里一句：「千里」は次に引く鮑照詩のように、二人の隔たりの大きさをいう。一句は、遠く離れた二人がともに月の光に照らされることをいう。劉宋・鮑照「月を城西門解中に翫ぶ（翫月城西門解中）」（『文選』卷 30）に「三五二八の時、千里 君と同じくす」。「月華」は月の光。梁・江淹「雜體詩・王徵君 養疾」（『文選』卷 31）に「清陰 往來すること遠く、月華 前墀に散ず」

【補説】

古来多く作られてきた「有所思」と同じように閨怨の作。詩題を句中に詠み込む作例も従来の作に少なからず見いだすことができる。五言四句という最もコンパクトな詩型のなかに、愛する人と遠く離れて一人ある孤独と、月の光を分かち合う慰めという、閨怨詩習用のモチーフを詠み込む。月の光は、主人公の内面にわずかな感謝を与えると同時に、読者の視線のなかに、孤独の主人公のすがたを美しく浮かび上がらせる。孤独や哀しみを美しく描く閨怨詩の典型。

(和田英信)

## 別裁-46 嚴粲「閏九」

「閏九」

前月登高去

猶嫌菊未黃

秋風不相負

特地再重陽

ぜんげつ とうこう さ  
前月 登高に去り  
な きら きく いま き  
猶お嫌う 菊の未だ黄ばまざるを  
しゅうふう あいそむ  
秋 風 相負かず  
とくち ちょうよう ふたたび  
特地に 重陽を 再びす

### 【詩人小伝】

嚴粲（生卒年未詳）、字は明卿、またの字は坦叔。邵武（現在の福建省邵武市）の人。清湘令（現在の広西省全州県）に任じられた。毛詩に詳しく、朱熹の説を取り入れつつ自ら注を付けた『嚴氏詩輯』がある。南宋の江湖詩人の一人。

### 【収載】

『華谷集』（『江湖小集』巻 11、『兩宋名賢小集』巻 329）、『全宋詩』巻 3129

### 【押韻】

「黄」：下平声 11「唐」、「陽」：下平声 10「陽」（同用）

### 【訳】

先月の九月九日、重陽の日は登高へ行ったが、  
残念なことに、菊の花はまだ綺麗に黄色く色づいていなかった。  
しかし秋風は私の期待を裏切らずに、  
特別にもう一度重陽を楽しませてくれた。

### 【注】

- 閏九：閏とは閏月。閏九とは通常の九月の後に置かれた閏月の呼称。月齢を基準とする太陰太陽暦は、太陽の運行を基準とする太陽暦と一年で十日と二十一時間ほどの差が生じる為、三年に一度、あるいは五年に二度閏月を置く。南宋の閏九月は建炎三年（1129）、紹興十八年（1148）、開禧元年（1205）、嘉定十七年（1224）、淳祐三年（1243）の五回。嚴粲の生卒年は未詳だが、そ

の著作『嚴氏詩輯』の自序に「淳祐戊申 (1248) 夏五月華谷嚴榮序」とあり、本詩の制作時期はこれに最も近い閏九月、つまり淳祐三年 (1243) の可能性がある。

- 登高：陰暦九月九日の重陽節に高いところに登り、菊の花びらをうかべた酒を飲むこと。唐・崔国輔「九日」(『全唐詩』巻 119) に「江辺の楓落ち菊花黄なり、少長登高して一に郷を望む」とある。
- 不相負：期待を裏切らない。唐・李白「白頭吟」(『全唐詩』巻 163) に「古来得意 相負かず、祇今 惟見る 青陵台」とある。
- 黄：菊の花が黄色く色付くこと。『礼記』月令では「季秋の月……鴻雁来たりて賓たり、雀大水に入り蛤と為り、菊に黄華有り」とある。また唐・白居易「夢得と酒を<sup>か</sup>沽い間飲し且つ後期を約す (與夢得沽酒間飲且約後期)」(『全唐詩』巻 457) に「更に待つ 菊 黄ばみて 家釀 熟し、君と共に一酔 一陶然するを」とある。
- 重陽：陰暦九月九日の節句。一桁の陽数 (奇数) で最大の九が重なることから重陽という。唐・孟浩然「故人の荘に過る (過故人荘)」(『全唐詩』巻 160) に「重陽の日に到るを待ち、還た来たりて菊花に就かん」とある。

#### 【補説】

九月のあとに閏九月があれば、重陽の節句も自ずと二回。恐らくは暦の関係で、この年の気候と寒暑は平年と少しずれていたのであろう。そのために、一度目の重陽の節句時の登高では、菊の花がまだ十分に黄色く色付いておらず、秋の景色を満喫できなかった。そうした詩人の思いを慰め、詩の雰囲気を一変させるのが、擬人化した秋風であった。季節の巡りに従って風が冷たくなり、菊の花が黄色く色付くのは自然本来の変化だが、詩人はそこに秋風の好意を感じ取った。だからこそ、詩中の秋風は「特地」や「不相負」と、自発的に行動する存在と見做されている。南朝の作者未詳の楽府「西州曲」(『樂府詩集』巻 72) の「南風我が意を知り、夢を吹き西州に到らしむ」と描かれる風もまた、主体性を持って詩人と感情を通わせるように描かれている。

(許喬)

## 別裁-47 利登「沽酒」

「酒を沽う」

有錢但沽酒

莫買南山田

勾引催租人

驚散青松煙

ぜにあ た さけ か  
 錢有れば但だ酒を沽い  
 なんざん はたけ か な  
 南山の田をかうこと莫し  
 こういん さいそ ひと  
 勾引す 催租の人  
 きょうさん せいしょう けむり  
 驚散す 青松の煙

### 【詩人小伝】

利登（生卒年未詳）、字は履道、号は碧澗。金川（現在の江西省新干県）の人。隠者のような暮らしをしていたが、宝慶年間（1225-1227）に盜賊がはびこったため、梅川（現在の江西省）に乱を避けた。その後、晩年の淳祐元年（1241）に進士となり、官は寧都尉についた。南宋の江湖詩人の一人。

### 【収載】

『利登皴稿』（『江湖小集』巻 82）、『全宋詩』巻 3330

### 【押韻】

「田」「煙」：下平声 1「先」

### 【訳】

金があれば、ひたすら酒を買い、  
 南山のふもとの畑は買わなかった。  
 小作料の取り立て人につかまって、  
 松にかかったもやも、びっくり散り散り。

### 【注】

- 沽酒：酒をかう。別裁-25「西村」注参照。利登「春日」（別裁-48 利登「春日」とは別作品。五律）にも「貧なる為に酒を沽うこと少なく、病に困りて衣を着ること多し」の対句がある。
- 南山：南にある山。劉宋・陶淵明「雜詩二首」其一（即ち「飲酒二十首」其五、『文選』巻 30）の「菊を采る東籬の下、悠然として南山を望む」や、唐・孟浩然「長安の主人の壁に題す（題長安主人壁）」（『全唐詩』巻 160）の「久

しく南山の田を<sup>みだ</sup>廃し、<sup>たす</sup>叨りに東閣の賢を陪く」を踏まえ、隠者が住む場所としての山を指していると考えられる。

- 勾引：ひっぱりこむ。唐・姚合「友人に送別す（送別友人）」（『全唐詩』巻496）に「独り山中<sup>お</sup>に向いて紫芝<sup>もと</sup>を覓め、山人勾引して住むこと多時なり」。
- 催租人：土地の使用税を取りたてる役人。あるいは、小作料を回収にくる人。ここでは、南宋・恵洪『冷齋夜話』巻4にある、北宋の詩人潘大臨が、詩を作っていたときに、取り立て人があらわれて、興をそがれた話を意識していると考えられる。「黄州の潘大臨詩に工<sup>たく</sup>みにして、佳句多し。然れども甚だ貧し。東坡、山谷尤も之を喜ぶ。臨川の謝無逸 書を以て新作有りや否やを問う。潘 答書に曰く『秋来たり景物件件是れ佳句なり。恨むらくは俗氣<sup>へいえい</sup>の蔽翳する所と為る。昨日閑ろに卧し、林を<sup>みだ</sup>攪す風雨の声を聞けば、欣然として起ち、其の壁に題して曰く「満城の風雨重陽に近し」と。忽ち催租の人至り、遂に意敗れ、此に止む。一句のみ奉じて寄す』と。聞く者其の迂闊なるを笑う」というものである。また、同じように、この話を踏まえて催租人によって一旦詩興をそがれたという表現が、利登よりやや早く、南宋・戴敏の「後浦園廬」（『東臯詩鈔』巻1）にある。「催租の人去りて後、続け得たり夜来の詩」。
- 驚散：びっくりして逃げること。晋の褚裒<sup>ちょほう</sup>が南渡の直後、江南の名士が集まったある宴席で、顔を知られていないため軽く扱われていたが、しばらくたって高名な褚裒とわかると、「四座 驚散し、狼狽せざる無し」となった（『世説新語』輕詆）。
- 青松煙：青松は青々と茂った松。その松の木を焼いた煤で作った墨を松煙墨と呼ぶ。『北堂書鈔』巻104 墨に「出青松煙」の項目が立てられており、「曹植『樂府詩』に云う、墨は青松煙に出で、筆は狡兔の翰に出ず」との注がある。また「松煙」で、松林中のもやを指すこともあり、唐・白居易「長安閑居」（『全唐詩』巻436）に「風竹 松煙 昼も関<sup>つね</sup>を掩い、意中は長に深山に在るに似たり」とある。

#### 【補説】

一見、ありふれたことばを用いた単純な詩のようであるが、実は、起句以外

はすべて典故のある表現であり、典故の背景にある物語を踏まえながら詩の内容を捉える必要がある。

語注であげた陶淵明の南山は廬山であり、孟浩然の南山田は、鹿門山の潤南園であり、同じ山を指していない。ただ、陶淵明も孟浩然も田園を詠った詩人であり、作者の利登自身も作者小伝で紹介したように、若い頃から隠棲生活を送っていた。そのため、南山は、具体的な山を指すのではなく、隠者が住む場所の象徴として表現されているものと考えた。南山の田を買わず、畑を自分で所有していないために、小作料の取り立て人（催租人）がやってくる、となり、承句と転句の内容につながりが生じる。「沽酒」注で紹介した「春日」詩の前半は、「幽偏 一事無く、終日自ら長らく哦す。僕に荒圃を鋤くを課し、人に断簑を補うを邀う」とあり、詩人の貧しい生活が詠われている。「沽酒」では、それにも関わらず、小金が手にはいると、まず酒を買ってしまう己を諧謔的に詠っている。おそらく、隠者暮らしをしていた中で生み出された詩であろう。

南山と青松とを一首に詠み込んだのは、もしかしたら、晋・潘尼「大駕を迎う（迎大駕）」詩（『文選』巻 26）を意識したものかもしれない。この作品は、「南山は鬱として岑峯たり、洛川ははや迅くして且つ急なり。青松はなが脩き峰を蔭い、緑蘩はさわ広きこうむ隅に被れり」とあり、冒頭一句目に南山、三句目に青松が登場する。この詩の南山は、洛陽にある山であり、陶淵明や孟浩然の南山とは、また違う山である。この潘尼詩を踏まえているからといって、とくに新しい解釈が生まれるわけではない。ただ、利登は、「玉臺體」と題した七絶を数首作っており、六朝詩を意識した詩作も行っていた。作詩技巧の巧みさを誇示するために、『文選』の詩と同じものを詠み込もうとした可能性は大いにあるのではないだろうか。また、松と山は縁語としてよく組み合わせてもちいられることばでもある。

結句の「驚散」は、松林にかかったもやがちりぢりになって消えることと同時に、転句にある『冷斎夜話』の催租人の典故も踏まえ、詩を作ろうとして墨を用意していたのに、取り立て人の出現によって、興がそがれてしまった、の意味も含む。つまり、青松煙の語を双関語として用いている。

（佐野誠子）



## 別裁-48 利登「春日」

「春日」

雨過苔猶濕

風來戸半開

閑花忽落盡

啼鳥自飛來

あめ す こけ な うる  
雨過ぎて苔 猶お湿おい  
かぜ き と なか ひら  
風来たりて戸 半ば開く  
かんか こつ お つ  
閑花 忽として落ちて尽き  
ていちょう みずか と き  
啼鳥 自ら飛び来たる

### 【収載】

『利登叢稿』（『江湖小集』巻 82）、『全宋詩』巻 3330

### 【押韻】

「開」「来」：上平声 16「咍」

### 【訳】

雨は降り止んだが、苔はなおみずみずしく、  
風は吹き抜けて、扉は少し開いている。  
野の花は、一瞬にして散り落ちたが、  
鳴く鳥は、ひとりでに飛んでやってきた。

### 【注】

- 猶湿：水分をたっぷりと含ませ潤っている様子。ここでは、雨が上がった直後であることをいう。唐・戴叔倫「戯れに顧十一明府を留む（戲留顧十一明府）」（『全唐詩』巻 274）に「江 明るくして雨 初めて歇み、山 暗く雲 猶お湿う」とある。
- 戸半開：扉が半開きの状態。ここでは、風によって吹き開けられたことをいう。唐・元稹「鶯鶯傳」（『太平広記』巻 488）の崔鶯鶯が詠う「張生に答う（答張生）」（『全唐詩』巻 800）に「月を待つ西廂の下、風を迎えて戸 半ば開く」とある。
- 閑花：野生の花。人の手が加わっていなく、ひとりで咲いてひとりで散る花をいう。唐・沈佺期「仙萼池亭にて宴に待す 応制（仙萼池亭侍宴應制）」（『全唐詩』巻 97）に「閑花 石竹に開き、幽葉 薔薇を吐く」とある。

【補説】

ここでは、春の情景が詠われる。雨と関連して、風、花、鳥を詠うのは、唐・孟浩然の有名な作品「春暁」(『全唐詩』巻 160)「春眠 暁を覚えず、处处 啼鳥を聞く。夜来 風雨の声、花落つること知んぬ多少ぞ」を想起させる。ただ、「春暁」では主に夢うつつに音として耳(「聞」「声」)から入ってくる情報を元に間接的に詠んでいるのに対し、ここでは、「風」という目に見えないものに関しても、その存在を「戸半ば開く」と目で確認しているように、視覚で捉えた風、花、鳥の様子を元に詩が構成されている。

(鄭月超)

## 別裁-49 張道洽「嶺梅」

みね うめ  
「嶺の梅」

到處皆詩境

隨時有物華

應酬都不暇

一嶺是梅花

いた ところ みな しきよう  
到る 処 皆 詩境  
とき したが ぶっか あ  
時に 随 いて 物華有り  
おうしゅう すべ いとま  
応 酬 都て 暇 あらず  
いちれい こ ばいか  
一嶺 是れ 梅花なり

【詩人小伝】

ちょうどうこう  
張道洽(1205?-1268)、字は沢民、号は実斎。衢州開化(現在の浙江省開化県)の人。端平二年(1235)の進士。広州司理参軍、池州簽判、襄陽府推官などを歴任。梅花の詩を数多く詠み、元・方回は『瀛奎律髓』巻 20 梅花類にその五言十六首・七言二十首を採録する。

【収載】

『実斎詠梅集』(『宋百家詩存』巻 35)、『全宋詩』巻 3293

【押韻】

「華」「花」: 下平声 9「麻」

【訳】

山のどこに行っても詩興が掻き立てられる盛りのとき、

刻々と変じていく美しいその姿に目を見張る。

そんな情景を詩に詠みこむのに忙しく、手を休めるひまなど少しもない、  
山一面に広がるこれは梅花の木々なのだから。

#### 【注】

- 嶺梅：ここでは、山一面に咲き広がる梅の木々を指す。
- 詩境：詩興をもたらし、すばらしい場や空間のこと。唐・雍陶「韋處士ぎょうせいの郊居（韋處士郊居）」（『全唐詩』巻 518）に「満庭の詩境 紅葉翻り、繞砌の琴声 暗泉滴る」という。
- 物華：季節ごとに見られる、自然の美しい情景。唐・孟浩然「夏日 弁玉法師の茅齋（夏日辨玉法師茅齋）」（『全唐詩』巻 160）に「物華 皆玩めずべく、花蕊 四時に 芳かぐわし」という。
- 応酬一句：応酬は、自然の情景に対応すること。『世説新語』言語に「山川自ら相映発し、人をして応接に暇あらしめず」とあるのを踏まえた表現。ここでは特に、素晴らしい情景に触発されて、休みなく詩を詠む様子をいう。

#### 【補説】

詩題にみえる嶺梅は、梅嶺の地に咲く梅花のことだろう。梅嶺とは、江西省と広東省の境界に位置する大庾嶺の別名。梅嶺の名は、前漢の梅鋗が要塞を築いたことに由来するが、後世には梅花が咲く地として知られるようになった。例えば、唐・劉長卿「裴二十端公の嶺南に使いするを送る（送裴二十端公使嶺南）」（『全唐詩』巻 147）に「桂林 葉の落つる無く、梅嶺 自ずから花開く」という。

本詩もまた、張道洽が官吏として広州に赴任していた頃に詠まれた作品と推察される。第三句まで、対象を明確にしないままにその優れた景色への称賛を重ね、最後の第四句に到って初めて梅花と提示する。倒置表現を用いることで、かの地の梅花が詩人へ如何に鮮烈な印象を刻んだかが、より深く伝わってくる。

（加納留美子）

## 別裁-50 朱繼芳「塵外」

「じんがい塵外」

塵飛不到處

ちり と 塵飛いたびて到らざる ところ 処

山色入芒屨

さんしよく ぼうく い 山 色 芒屨入る

乘興一長吟

きよう じよう ひと ちようぎん 興 に 乗 じて一たび長吟するも

回頭已忘句

こうべ めぐ すで く わす 頭 を回らせば已に句を忘る

### 【詩人小伝】

朱繼芳（生卒年未詳）、字は季実、号は静佳。建安（福建省建甌）の人。紹定五年（1232）の進士。龍尋県、桃源県の知事を歴任、宜州教授に移されたが赴任しなかった（『両宋名賢小集』巻 317、『静佳龍尋稿』解題）。南宋の江湖詩人の一人。

### 【収載】

『静佳乙稿』（『江湖小集』巻 32、『両宋名賢小集』巻 318）、『全宋詩』巻 3279

### 【校異】

「屨」、底本は「履」に作るが、諸本により改める。

### 【押韻】

「処」：去声 9「御」、「屨」「句」：去声 10「遇」（通押）

### 【訳】

世俗の塵が飛んでも汚されぬところ、  
いま山の景色にわら草屨の足を踏み入れる。  
興に任せて詩を詠じてはみても、  
またたくまにその句を忘れてしまう。

### 【注】

- 塵外：世塵の外の世界。後漢・張衡「思玄賦」（『文選』巻 15）に「塵外に遊びて天を瞥す」。
- 塵飛一句：南宋・史達祖「隔浦蓮」（『梅溪詞』巻 1）に「紅塵 飛びて到らざる処、此の地 暑無きを知る」。「処」は、その時、その場というタイミング

をいう。

- 山色一句：「山色」は山の景色、気配。「芒屨」はカヤで編んだ草履。北宋・蘇軾「梵天寺にて僧守詮の小詩の清婉愛すべきを見て次韻す（梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛次韻）」（『合注』巻8）に「幽人 行きて未だ已まず、草露 芒屨を湿す」。「山色」が窓や酒杯・酒樽あるいは詩に入るという発想はま見られるが、ここでは草履を履く足を「山色」の中に踏み入れると解した。
- 乗興：『世説新語』任誕に、王徽之が大雪の夜ふと友人の戴逵のことを思い出し、遠路はるばる訪ねたが、門前まで至って会わずに引き返した。人が理由を尋ねると「本と興に乗じて行き、興尽きて返る、何ぞ必ずしも戴に見えん」と答えたという。
- 長吟：ここでは詩句を作る、詠じるの意。
- 回頭：視線を転じるまのわずかな時間。

#### 【補説】

南宋・陸游の手元にあった蘇軾の詩稿に「清吟 夢寐に雑わり、句を得るも<sup>ま</sup>旋た已に忘る」とあった。また後年惠州に左遷された時の蘇軾の作に「春江に佳句有るも、我酔いて渺莽に墮つ」とある。これについて陸游は「又た少作に一等を加う。近世の詩人、老いて益ます嚴なる、蓋し未だ東坡の如き者有らざるなり」と、同趣旨のモチーフが後年さらに洗練を増したことを評価する（陸游「東坡の詩草に跋す（跋東坡詩草）」、『渭南文集』巻27）。

河上肇はその「放翁詩話（六）」（『河上肇全集』20、岩波書店1982）にこの記事を引き、「清吟雑夢寐、得句旋已忘といふ句のある東坡の此詩の全容はどんなものであるのか、私の座右にある蘇東坡詩集の中には、いくら探しても出て来ない。それは宋人朱繼芳の塵飛不到処、山色入芒屨、乗興一長吟、回頭已忘句を思ひ起さしめるが、恐らく朱繼芳の方が年代は後であらう。春江有佳句、我酔墮渺莽の方は、幸にして詩の全体を求めることが出来た。それは和陶園田居六首の一つで……さて此の最後の一聯について久保天随氏の講釈を見ると、それにはかう書いてある。『春江に臨めば、自然、佳句も出来るが、やがて我は酔うて、草木渺莽たる中に倒れてしまつた』。これでは東坡先生も苦笑されざるを得ないだらう。詩にいふ渺莽は、広くしてはてしなき貌。そしてその

渺莽に墮つるものは、東坡先生ではなく、春江の佳句である。かくして、句を得てまた已に忘ると云ふやうな、おもしろくはあってもまだ露骨なるを免れなかったものは、春の霞の如く詩化され、そこに一段の進境を示す。放翁の老いて益々嚴といふ評言は、それを指すのであらう」という。

句を得てもすぐさまに忘れるというのは、詩を詠うその瞬間の楽しさ、詩を作ること自体の喜びを喚起する。詩句そのものは失われてしまったがゆえに、その詩句の生まれ得た一瞬のあったことが忘れがたく思い起こされる。また、句を忘れたというその「句」そのものは忘れたとしても、それを詠う詩（メタ詩）はのこる。河上のいう「おもしろさ」とはそういうものであろう。たしかに「得」と「忘」とそのままにいうのは、「春江」に得た「佳句」を「我酔いて渺莽に墮つ」と詠う東坡詩にくらべれば、たしかに「露骨」ではあるが。

（和田英信）

## 別裁-51 俞桂「江上」

こうじょう  
「江上」

江頭雲閣雨

柳色與春深

船發春風阻

誰知客子心

こうとう うんかく あめ  
江頭 雲閣の雨  
りゅうしよく はる とも ふか  
柳 色 春と与に深し  
ふねはつ しゅんふう はば  
船発せんとすれど春風に阻まる  
たれ し かくし こころ  
誰か知らん客子の心

### 【詩人小伝】

俞桂（生卒年未詳）、字は晞鄴。仁和（現在の浙江省杭州市）の出身。紹定五年（1232）の進士。南宋の江湖詩人の一人。

### 【収載】

『漁溪乙藁』（『江湖小集』巻 54）、『漁溪詩藁』（『兩宋名賢小集』巻 309）、『全宋詩』巻 3277

### 【押韻】

「深」「心」：下平声 21「侵」

### 【訳】

川のほとりの高い楼閣に降りしきる雨、  
春の深まりとともに柳の葉が色づいてゆく。  
船は発<sup>た</sup>とうとして春風に押し戻される。  
旅人のこんな気持ちを誰も知りはしない。

### 【注】

- 雲閣：雲に届くように高い楼閣。前漢・揚雄「甘泉賦」（『文選』巻7）に「雲閣に乗りて上下す」とあり、李善注に「雲閣は高きこと雲に連なるを言うなり」とある。
- 柳色一句：「柳色」は柳の風情、様子。柳は春先に他の木々に先駆けて芽吹くことから、新緑を描く句に多くみえるがここでは深緑。春が深まって、柳の葉の緑が濃くなっていく様子をいう。唐・王昌齡「少年行二首」其二（『全唐詩』巻140）に「高閣歌声遠く、重門柳色深し」とある。
- 客子心：「客子」とは旅人のこと。ここでは道を急ぐ旅人の気持ちを言う。補説参照。

### 【補説】

春の盛りに、旅人は故郷への道を急いでいるのであろうか。あるいは任地に向かう旅の途中なのかもしれない。詩人の置かれた状況は明らかではないが、川べりの楼閣で別れの宴を設け、見送りの人々とともに、降りしきる雨と潤う柳の気配に行く春を惜しんでいるようである。しかし、結句「誰知客子心」には道を急ぐ旅人の心を誰も知りはしないのだと詠う。この句は南宋・朱熹「劉氏山館の壁間に画く所の四時景物を観る……（観劉氏山館壁間所畫四時景物各有深趣……）」其四（『晦庵集』巻4）にみえる「匹馬 関山の路、誰か知らん客子の心」と同様に、旅人の孤独、焦り、もどかしさを描く句であろう。多くの場合、春の雨は植物を育む恵みをもたらす存在として描かれ、また柳の緑も春を代表する美しい景物の一つだが、いまその中に在る旅人の胸中には、春の喜びよりも、目的地に至らぬままに美しい春がみすみす過ぎていくことへの焦りが強い。本来は心地よいもののはずの春風までもが旅路を阻み、船出もままならなくなってしまう。この詩の眼目は、心地よい春の景物が、ますます旅人の

寂しさ、焦りを際立たせている点にあると言えよう。

なおこの詩は『海塘録』巻 25 では南宋の僧永頤の詩とされる。

(高芝麻子)

## 別裁-52 家鉉翁「寄江南故人」

「江南の故人に寄す」

會向錢唐住	曾て錢唐に向いて住み
聞鶻憶蜀鄉	鶻を聞けば蜀郷を憶う
不知今夕夢	知らず今夕の夢
到蜀到錢唐	蜀に到るか錢唐に到るかを

### 【詩人小伝】

家鉉翁(1213-1297)、眉州(現在の四川省眉州市)の人。恩蔭によって官に補せられ、常州知府、戸部侍郎などを歴任し、進士出身を賜って、簽書樞密院事に任じられた。宋が滅んだ後、元に仕官せず、隠居して春秋学を教えた。『宋史』巻 421。

### 【収載】

『則堂集』巻 6、『全宋詩』巻 3344

### 【押韻】

「唐」：下平声 11「唐」、「郷」：下平声 10「陽」(同用)

### 【訳】

かつて錢唐に暮らしていたその時は、  
ホトトギスの鳴き声を聞くと、蜀地の故郷を懐かしんだもの。  
されどいったい今宵の夢に見るのは  
ふるさとの蜀か、あるいは錢唐か。

### 【注】

- 錢唐：即ち錢塘。地名。現在の浙江省杭州市。南宋の首都臨安府が置かれた。
- 鶻：杜鵑、ホトトギス。ホトトギスの鳴き声は「不如歸去(帰り去るに如か



ず)」のように聞こえるので、望郷の思いをかきたてるものとされる。唐・顧況「故園を憶う（憶故園）」（『全唐詩』巻 267）に「惆悵す 山多く人復た稀なるを、杜鵑 啼く処 涙 衣を沾す。故園 此れより去ること 千余里、春夢猶お能く 夜夜に帰る」とある。

- 蜀郷：詩人の家郷、現在の四川省。晋・左思「蜀都賦」（『文選』巻 4）に「碧は萐弘の血より出で、鳥は杜宇の魄より生ず」とあり、劉逵注は『蜀紀』を引き、古代蜀国の望帝（杜宇）が死んだ後ホトトギスに変化した伝説を紹介している。
- 夢：夢は多く故郷に帰る夢をいう。唐・劉長卿「旅に丹陽郡に次る……（旅次丹陽郡……）」（『全唐詩』巻 150）に「楚水 帰夢渡り、春江 故園に連なる」。

#### 【補説】

旅人が故郷を懐かしむのは自然なことであり、中国の文学においても、「郷関の思い」は古くて、重要なテーマのひとつであった。『礼記』檀弓上に「狐死して正しく丘に首するは仁なり」とあり、「古詩十九首」其一（『文選』巻 29）に「胡馬 北風に依り、越鳥 南枝に巣くう」とある。これに対し、長く他郷に住み、やがてその地に親しみ、そこを離れたのちに、懐かしむという作品は決して多くはないが、印象的な作品がいくつかある。唐・賈島の「桑乾を渡る（渡桑乾）」（『全唐詩』巻 574）「并州に客舎して已に十霜、帰心 日夜 咸陽を憶う。端無くも更に桑乾の水を渡り、却って并州を望めば是れ故郷」はその一つである。本詩もまたそうした作品の一つに数えられよう。

（許喬）

## 別裁-53 羅公升「溪上」

けいじょう  
「溪上」

往歳貪奇覽

今年遂考槃

門前溪一髮

おうさい きらん むさぼ  
往歳 奇覽を 貪り  
こんねん こうはん と  
今年 考槃を 遂ぐ  
もんぜん けいいつぱつ  
門前 溪一髮

我作五湖看      われ   ご   こ   な   み  
我 五湖と作して看ん

【詩人小伝】

羅公升（生卒年未詳）、字は時翁、また滄州とも。永豊（現在の江西省吉安市）の人。南宋末に軍功によって県尉を授かる。祖父の羅開礼は文天祥の勤王に随って、敗れた後に捉えられ、断食して死んだ。南宋が滅びたのち、私財を傾けて北方の燕、趙の地に行き、宋王朝の宗室である趙孟榮らと、復権をたくらんだが、失敗した。その後故郷に帰り、生涯を終えた。清朝同治年間の『永豊県志』巻 24 に伝あり。

【収載】

『滄州集』（『宋百家詩存』巻 40）、『全宋詩』巻 3693

【押韻】

「槃」：上平声 26「桓」、「看」：上平声 25「寒」（同用）

【訳】

昔は絶景を堪能したものだが、  
今年になって隠居とあいなった。  
門前に髪の毛一筋のような細い谷川がある。  
私はこれを五湖とみなし隠棲の場所だと思って眺めよう。

【注】

- 奇覧：すぐれた眺め。この詩以前には用例を見いだせず、明清になってよく使われるようになる語。類似の表現である「奇観」の語は、古くは後漢・王充『論衡』から用例があり、唐・岑参「太一石鰲崖口潭の旧廬に王学士を招く（太一石鰲崖口潭舊廬招王學士）」（『全唐詩』巻 198）では、「幽趣 倏ち万変し、奇観一端に非ず」と隠者の住まう場所の表現として用いられている。また、「奇勝」の語は、五代頃から確認できる。五代・杜光庭「空明洞に題す（題空明洞）」（『全唐詩』巻 854）に「問わんと欲す空明の奇勝なる処、地藏の方石 恰も金の如し」とある。
- 考槃：『詩経』衛風にある詩題。毛詩の序には「莊公を刺るなり。先公の業を継ぐ能わず、賢者をして退きて窮処せしむ」とあり、隠居することを指す。奇覧注中の岑参詩の末尾には「此の地遺老すべし、君に勧む 来たりて考槃

するを」とある。

- 一髪：一筋の髪の毛。ここでは、門前に流れる谷川を指していると考えられる。北宋・曾鞏「麻姑山にて南城の尉羅君を送る（麻姑山送南城尉羅君）」（『元豊類藁』巻4）に「下りては荊呉に粟粒の群山有り、又た甌閩に一髪の平川有り」とある。ちなみに、北宋・蘇軾「澄邁驛の通潮閣（澄邁驛通潮閣）二首」其二（『合注』巻43）「余生 老いんと欲す海南の村、帝 巫陽を遣りて我が魂を招く。杳杳として天低く鶻没する処、青山一髪是れ中原なり」の「青山一髪」の表現は有名で、蘇軾以降よく使われる。
- 五湖：中国呉越地区の五つの湖。どこを指すかは一定しない。この詩においても具体的な湖の名を思い浮かべるよりも、漠然と南方の巨大な湖を想像して使った語と考えた方がよいだろう。また、『国語』越語下に「范蠡 輕舟に乗りて以て五湖に浮かぶ」と、越王を助け、呉を亡ぼしたあと范蠡が五湖に隠居したという故事があることから、隠遁する場所を指すこともある。

#### 【補説】

奇覧とあるのは、羅公升が若い頃に旅した地を指しているのだろうか。この詩の制作時期は、隠居した直後だと考えられる。旅の人生と、これからの定住の人生、という大きな転機の感慨を詠んでいるものと解釈した。語注で引用した岑参の詩は、考槃（隠居）に値する土地を「奇観」と表現したが、羅公升は、隠居する土地を小さな世界として表現した。その最たるものが「一髪」の語であろう。曾鞏の古詩は、広大な景観を殊更矮小に描く語として一髪を用いた。蘇軾の「青山一髪」も同様に見えるか見えないかわからない目指すべき中原の山々を髪の毛に喩えた。このように、大きなものを敢えて髪の毛一筋とすることが表現の妙であったのだが、羅公升は、目の前の谷川を一髪としているところが違っている。敢えて谷川を細いものに喩えることで、谷川の先につながる五湖という広い世界を強調し、そのような大きな世界とのつながりを忘れない、という意志の表明をしようとしているのかもしれない。

（佐野誠子）

## 別裁-54 羅公升「送歸使絶句」

「<sup>き</sup>し<sup>し</sup> <sup>おく</sup> <sup>ぜっく</sup>  
帰使を送る 絶句」

梁楚連天闊

<sup>りょうそ</sup> <sup>てん</sup> <sup>つらな</sup> <sup>ひろ</sup>  
梁楚は天に 連りて闊く

江湖接海浮

<sup>こうこ</sup> <sup>うみ</sup> <sup>せつ</sup> <sup>う</sup>  
江湖は海に接して浮かぶ

故人相憶夜

<sup>こじん</sup> <sup>あいおも</sup> <sup>よる</sup>  
故人 相憶う夜

風雨定何州

<sup>ふうう</sup> <sup>さだ</sup> <sup>いず</sup> <sup>しゅう</sup>  
風雨 定めて何れの州 ならん

### 【収載】

『滄州集』（『宋百家詩存』巻 40）、『全宋詩』巻 3693

### 【押韻】

「浮」「州」：下平声 18「尤」

### 【訳】

梁と楚の地はどこまでも空につらなって広がり、  
江湖は遙かな海につづくように浮かんでいる。  
今夜、旧友を思う。  
この風雨の中、いったいどこにいるのだろう。

### 【注】

- 梁楚・江湖二句：「梁楚」「江湖」はいずれも高大な土地・空間をいう。前者は視線を上にして、空の下に広がるといい、後者は視線を下に向けて、海のう上に広がるという。「梁」は長江の北、「楚」は南を広く指していう。二句は唐・杜甫「岳陽楼に登る（登岳陽樓）」（『全唐詩』巻 233）の「呉楚 東南に圻け、乾坤 日夜浮ぶ」を明らかに意識したものであろう。
- 定：疑問の語気を強調する。いったい、そもそも。

### 【補説】

旅立つ旧友を見送る。高所より遠くまで続く地と江を眺める視点で、広い空間を詠う。詩人は、はてしなく続く地と江を眺めながら、雨のなか遠く離れていく友を思い、旅路を案じる。

『全宋詩』では「送歸使絶句」七首が連作として収められており、本詩は其四

に当たる。

明治十五年日本で出版された『批評宋詩鈔』に本詩が収められており、後藤元太郎が「松陰云う、唐人の風致あり」と評を付しているのは、注に引いた杜甫詩の表現をふまえていることを指しているものであろう。

(大戸温子)